

卒論を書いた人の「声」

大学院生が語るリアルな
作業プロセスとアドバイス



名古屋大学附属図書館
サポートデスク

はじめに

大学4年生は忙しい。4年間で修得した単位を数え、卒業要件を確認し、就活のESを書いて、それを企業に送り、ゼミで演習を受け、卒業論文を書かなければならない。

筆者ら（サポートデスク院生スタッフ）も大学生だった頃があり、そうした忙しさを経験してきた。大学院に進むにあたり、ESではなく研究計画を書いて、企業ではなく大学に送り、演習でボロボロになりながら、卒業論文や卒業研究などを完成させた。

大学に通ったことがある者であれば、誰もが経験する4年生の忙しさにどうか役立つことはできないか、とくに大学に4年間も通っていたにもかかわらず、アカデミックの「アカ」の字くらいしかわからない「研究」について、もう少し“役に立つ”アドバイスができないか。こうした課題意識を共有しているのが、本書である。

本書はサポートデスク院生スタッフが開催している「卒論講座」の内容を文章化し、加筆・修正を加えた冊子である。そのため、基本的には「卒論講座」で話している内容がいつでも読んで確認できるような、いわば“辞書”のようなものを目指して書いた。

ただし、「卒論講座」というイベントとは違って、本書はあくまでも冊子であり、長々とした文章を読まなければならない。それは、すぐに欲しい情報を手に入れられる現代のネット社会においては不便極まりないかもしれない。

しかし、本書はそうした不便さをできるだけ無くそうと努力した。例えば、① 各章に「残り〇〇日」と書くことでどの時期に読むべきか、あるいは今の自分の着地点に合わせて読むべき箇所を確認できるようにしたり、② コラムを掲載することで、より詳細なアドバイスが欲しい方向けにも情報を足し算したりしている。逆に、③ 難しくてわかりづらい話ではなく、すぐに役立つわかりやすい話が欲しいという方に向けて内容も精査した。

こうした努力が報われるかはわからないが、卒業論文に困っている、あるいはこれから挑戦する学生に向けてできるだけ使いやすいものになることを切に願う。

また本書は、とにかく卒業論文の完成を目指して、やるべきことや気をつけることなどを紹介することに徹している。そのため、ところどころ論理の飛躍はあるかもしれない。一方で、大学院生の視点から肌感覚や経験も含めて、かなりリアルな〈アドバイス＝声〉を載せているつもりでもいる。そのあたりについて、専門家の方々（研究者等）にはご承知いただきたい。

さいごに、本書を読み始める大学生の方へ。これは決して正解ばかりが載っている参考書ではない。卒業論文を書く上で、なかなか聞けない“書いたことがある人の話”として読んでいただきたい。そのため、さまざまな選択において最終的な判断を下すのは皆様にお任せしたい。本書がその一助になれば幸いである。

執筆者一同

目次

はじめに	2
第 I 部 準備編	6
第 1 章 卒業論文と向き合う（提出まで 210 日）	7
1-1. 「卒業」というゴールが見えてきたのに	7
1-2. 卒業論文と向き合う…？	8
1-3. これから何をやっていくのか（本書の構成）	10
コラム① 卒論とは？	15
第 2 章 計画を立ててみた（提出まで 210 日）	18
2-1. 研究計画を立てなかったら…	18
2-2. なぜ計画を立てるのか	21
2-3. いつ計画を立てるのか	22
コラム② 研究計画	24
第 3 章 研究テーマを考える（提出まで 200 日）	27
3-1. 研究テーマとは？	27
3-2. 研究テーマは研究課題と何が違うのか？	28
3-3. 研究テーマを決めたきっかけ	29
コラム③ 研究テーマの考え方	31
第 4 章 先行研究って？（提出まで 180 日）	35
4-1. 先行研究はどこで使われているのか	35
4-2. 先行研究とは何だったのか？	37
4-3. 先行研究はどこで探すのか	38
コラム④ 先行研究の役割と読み方	41
第 5 章 調査をする人へ（提出まで 150 日）	44
5-1. 調査の概要と必要性	44
5-2. 調査を進めていく	45
コラム⑤ 調査設計	48

第Ⅱ部 応援編	52
第6章 章立てを考える（提出まで100日）	53
6-1. 章立ては論文の地図になる	53
6-2. 分野のフォーマットに合わせておく	54
6-3. 執筆しながら修正していく	55
コラム⑥ 論文構成	57
第7章 とりあえず書き始めなさい（提出まで70日）	60
7-1. 考えるよりも書く	60
7-2. 推敲と分量	61
7-3. 最後にひとつこと	62
第8章 書き方を学んでみる（提出まで50日）	64
8-1. 初めての長い文章	64
8-2. 論理的な文章を書く	65
8-3. 「わかりやすければ全てよし」	66
8-4. 参考図書を駆使しよう	67
コラム⑦ パラグラフ・ライティング	69
第9章 そろそろ出す準備を…（提出まで10日）	72
9-1. 【提出前】のチェック項目（内容編）	72
9-2. 【提出前】のチェック項目（形式編）※コラム⑧でも詳細に紹介している	73
コラム⑧ 校正の流れ	75
補章 出しても終わりじゃない！？（提出後）	77
10-1. 提出直後	77
10-2. ひと段落ついたら…	77
コラム⑨ 発表・口頭試問の準備	79
おわりに	82

第 I 部 準備編

第1章 卒業論文と向き合う（提出まで210日）

1-1. 「卒業」というゴールが見えてきたのに

大学4年生を迎えると、多くの大学生は「卒業」を意識するようになる。私もその一人だった。これまで頑張ってきた3年間を振り返りながら単位を計算し、修了に必要な履修を計画し、ES（エントリーシート）を書きながら自己PRを考え、「卒業」に向けたタスクを着々とこなしていく。

しかしながら、単位を取り、就活や院試を乗り越えるだけが「卒業」に向けたタスクではない。「卒業」するためには、卒論（あるいは、卒制や卒研）を合格する必要がある。ここに、「卒業」を意識している大学生をかなり悩ませる壁が登場するのだ。

ただし、その壁がどのように悩ませるのかはそれぞれ個人差がある。例えば、「Yahoo! 知恵袋」と呼ばれる質問サイトで「卒業論文 不安」と打って検索すると、該当するのは数千件である。それらにざっと目を通すと、「卒論が不安で仕方ありません」といった漠然とした不安を書いている質問もあれば、「盗用してしまったかもしれない」「保存はどのようにすれば」といった具体的な不安要素を書いているものもある。

では、なぜ卒論は学生を悩ませる壁になってしまうか。このようなことを考えたことがある大学生はほとんどいないと思う（私はたまたま大学院を志望していたから、この時点ではそれほど壁にならなかった。もちろん、書き始めてから辛い思いをしたが）。

考えられる理由① 「やったことがないから」

これまで大学の授業でやってきたのは、せいぜい「〇千字のレポート」や「〇ページのレジュメ」くらいだ。それらに費やす時間は多くても4時間程度である。一方で、卒論と聞くと、「〇万字」「数十ページ」「研究」「実験」「テーマ」と重量級の言葉が徐々に浮かび、「やったことないし」と感じ、悩むのだ。

考えられる理由② 「どうやればいいのかわからないから」

これは、すなわち、卒論を完成させる方法を知らないということだ。これは1つ目とも似ている。ただし、卒論と聞いて、それ自体に悩むわけではない点で異なると私は思う。あくまでも、卒論への意気込みはあるが、やり方がわからず悩むということである。

考えられる理由③ 「面倒くさいから」

これは1つ目と2つ目の理由を経て、最終的に大学生が感じることではなかろうか。結局、面倒なのだ。面倒だが「卒業」を意識している大学生にとっては避けては通れない。そ

の意識が再び面倒くさいという感情を生み出す。このような負の連鎖のなかで悩み出すのだ。「どうしてこんなに面倒なのか」と。



このように、卒論は、それ自体が未知で、その方法が不明で、その存在が疎ましい、だからこそ悩ましい壁になるのだ。

しかしながら、悩ましい壁の正体が見えてくると、その対処法を探ることが可能になる。そして、上記の理由から導き出せるのは、①未知を既知にして、②方法を明確にし、③存在を楽しめるものへと転回させるという3つの対処法である。

もしかすると、この3つの対処法は全てが成功するとは限らないかもしれない。しかし、1つでもクリアになれば、単位の取得や就活の成功と同様に、卒論の完成を「卒業」に向けたタスクに近づけることができるはずだ。

1-2. 卒業論文と向き合う…?

「悩ましい壁」に出会う頃合いは人それぞれ違う。本書を手にとっているみなさんは、運良く「悩ましい壁」に出会えたか、興味を持って読んでみたらそれが「悩ましい壁」だと気づいたのか、あるいは、逆に「悩ましい壁」だと思っていないかのいずれかだろう。

もし前者2つに該当したならば、まずは「卒業論文に向き合う」という作業を始めてほしい。なぜなら、卒業論文に向き合うという作業によって、案外それが「悩ましい壁」ではなくなるかもしれないからだ。とくに、本書によって「卒業論文に向き合う」ための少しばかりの方法を知れば、「わからない」「できるか不安」といった心配は一旦解消されるだろう。

では、卒業論文に向き合うとはどうすればよいのか。大学院生（＝すでに卒業論文に向き合ってきた人）だからこそ伝えられることがあると思って以下に記しておく。



(1) スケジュールを立てる

今すぐにでもやってほしいことは、卒業論文を書くスケジュールを立てることである。「えーっ、テーマを決めるとか、調査方法を決めるとかじゃないんですか？」と疑問に思うかもしれないが、違う。まずは計画を立てるべきである。私がそう思うのには、主に2つの理由がある。

1 つ目は、タスクごとの締め切りを決めることで、進捗状況を可視化できるからである。第2章で、卒業論文を完成させるまでに必要なタスクを紹介し、具体的に研究計画を作成するアドバイスを伝えるつもりである。

ただし、先取りするならば、卒業論文を完成させるためには、やるべきタスクが想像以上に多く存在する。それら全てを順調に進めるためには、遅れを出さないことが大事になる。

例えば、インタビュー調査をした場合に、そのデータを文字起こしするタスクが必要になる。文字起こしが遅れてしまうと、データ分析ができない。ここで遅れを出してしまうと、全体の進捗も遅れてしまう。そうした事態を防ぐためには、締め切りを決め、その日までに必ずやるということが大事になる。

2 つ目は、柔軟にアクシデントに対応することができるからである。1 つ目とも関連するが、卒業論文にはアクシデントがつきものである。私も、2 回論文データを失った経験がある。あれは想像以上に萎える。

しかし、もっと悲惨な状況は、それが余裕のないスケジュールのなかで起きてしまうことである。さらに、体調不良なんか起きてしまえば、それこそ大変だ。

以上より、アクシデントが起きても柔軟に対応するためには、ある程度スケジュールに余裕を持たせなければならない。そのためには、そのスケジュールを立てるところから始めよう。

(2) テーマを選ぶ

スケジュールほど大事なものではないが、次にやっていただきたいのは、やはり研究する内容の方針を考えることである（ようやく）。これに関しては、第3章と一緒にじっくりと考えていきたいのだが、取り急ぎお伝えしたいことがある。

まず、研究室の指導教員から研究テーマが与えられていない限りは、「指導教員の専門分野に近いもの」か「自分が興味関心を寄せているもの」のいずれかを選べばよいということだ。

「指導教員の専門分野に近いもの」を選ぶ場合、そのほとんどは指導教員からの「福音」や「神の啓示」（私の研究室で流行っていた言葉）がきっかけとなるだろう。そうした言葉がいただけたら、それに従ってみるのも良い。なぜなら、しっかりとした指導を受けられる可能性が高まるからである。

一方で、指導教員から強制されない限りは「自分が興味関心を寄せているもの」を選ぶことも可能だろう。むしろ、自由にテーマを決めることができれば、卒論完成に向けたモチベーションも維持することができるだろう。

また、付言するならば、自分が興味関心を寄せているテーマに対して、「テーマとして微妙かな」と遠慮してしまうことは避けてほしい。なぜなら、これも第3章で触れるつもりだが、どんな対象やテーマであっても研究につなげることはできるため、自分らしい研究に没頭できるからである。

ただし、いずれの選択にもデメリットは存在する。前者の「指導教員の専門分野に近いもの」を選ぶ場合、そのテーマにそれほど興味関心を抱くことができなければ、モチベーション維持が大変になる。

他方、後者の「自分が興味関心を寄せているもの」を選ぶ場合、先行研究の整理や課題設定などを自力でやらなければならない。また、「自分が想定しているデータが得られるかどうか」によってもテーマ選びに難航する可能性がある。例えば、大学生を対象にアンケートしたいといっても、日本全国の大学生に調査するには多額の費用がかかるため難しい、といった具合に。これは前者の「指導教員の専門分野に近いもの」を選んでも生じる可能性がある。

以上に挙げたようなメリットとデメリットを勘案しながら決めていただきたい。

(3) 文章化する

最後にやっていただきたいのは、文章化にこだわるということである。これは、卒業論文を進めるなかで、常に意識してほしいことでもある。では、なぜ文章化にこだわるのか。その理由は2つある。

1つは、文章化することによって他者と議論を可能にし、自分の研究をよりよいものに高められるからである。文章とは、極端におかしな言葉を使わない限り、相手に何かを伝える上で非常に便利な道具である。この道具を用いて、自分の考えていることや思ったことを表現し伝えることで、それをより効率的に受け取ってもらうことができる。

そうすると、卒業論文に関わる自分の考えや思いに対して、より適切なアドバイスを相手も伝えやすくなる。とくに、指導教員に何かを伝える場合には、文章化した資料を持っていくとよいだろう。

もう1つは、記録として残るからである。卒業論文を進めていくなかでは、さまざまなアイデアが浮かぶ。それは、ふとした瞬間に浮かぶことが多い。私が最もアイデアを発想するのは「お風呂」である。あの時間は素晴らしい。難点はシャワー中にアイデアが浮かんでも携帯やノートなどにメモできないことである。

ただし、それ以上に思い浮かぶ時間とは、何かを読んでいるときや、人とそれについて議論しているときだろう。そこで取ったメモは、必ず執筆作業の際に役立つものが多い。そして、メモを書く際にできるだけ文章にしておく、書いた内容の文脈が理解しやすくなる。そうした記録を残すためにも文章化は重要なのだ。

1-3. これから何をやっていくのか（本書の構成）

前節では、卒論が「悩ましい壁」であることに気づいた方は、3つから成る「卒業論文に

向き合う」ことをやってほしいとお伝えした。

では、次章からは、具体的に卒業論文を進めていくために「やるべきこと」や「考えるべきこと」についてお話ししたいと考えている。「本書の構成」として目次を再度掲載しているので、ご確認いただきたい。

続く第2章では、「計画を立ててみた」ということで、「卒業論文に向き合う」ために最も重要だと伝えたスケジュールを立てることに関する話を展開する。スケジュールを立てるといっても、単に予定を立てるだけではない。ここではあえて「計画」と呼んでいるが、日程に関する「計画」、調査に関する「計画」、研究相談に関する「計画」など、必要な「計画」は数多くある。そのなかでも、経験者たちが必要だったと考えるものを取り上げる。

第3章では、「研究テーマを考える」とあるが、これは研究テーマを一緒に決めていこうというスタンスで書かれている。ここでも詳しく述べるが、研究には「新規性」や「独創性」が必要とされる。それらをクリアするためには、自分自身の興味関心を学術的かつ社会的に意義ある「問い」に変える必要がある。その作業を一人でこなすは意外と難しい。そうした困難と一緒に乗り越えようというのが第3章の目的である。

第4章では、「先行研究って？」という疑問を持っている方に向けて書いてある。先行研究は、簡単にいえば「これまで行われてきた研究」のことである。だが、それを探し、読み、整理するのは容易ではない。加えて、第3章で紹介した学術的に意義のある「問い」を作るためには、先行研究の整理が必要となる。そのため、卒論を完成させるためには、先行研究との関わりを避けては通れないのだ。

第5章では、「調査をする人へ」のアドバイスを想定している。ここでいう「調査」とは、インタビュー調査やアンケート調査などを指す。ただし、本書は理系の学生にも読んでもらいたいため、「実験」についても触れる予定である。「調査」や「実験」はただ行うだけでは、質の良いデータを得ることはできない。そのようなデータを得るためには、事前準備を怠らず、計画的に進めることが重要である。この章では、そうした「調査」や「実験」に関わる準備や心構えについて話していきたい。

ここまですが第I部「準備編」である。まだ卒論を書くわけではないが、書くために必要な素材やデータを収集するという点で、卒業論文の「準備」なのである。一方で、第II部では、実際に書き始める人への「応援」を目指しているため、そのまま「応援編」にしてある。

第6章では、卒業論文の骨組みともいえる「章立てを考える」ことについて話す。章立てとは、まさに「本書の構成」のようなもので、どこで何を書くかを示したものである。ここで大まかな流れを決定することは、卒業論文の執筆の道筋を作ることでもある。そして、そのような道筋があれば、作業中に多少脱線しても大筋に戻ってくることができるだろう。長い文章を書く卒業論文にとっては大事なツールとなる。

第7章では、「とりあえず書き始めなさい」ということを声高に伝えたい。卒業論文は、いつまでも考えて、考えて、考えて、考えて…が可能な作業である。しかし、それではいつまで経っても完成することはない。ならば、思い切って書くことが大事である。何かを書く

ことは、2節でも述べた通り、新たな議論に広がりをもたせることができる。とりあえず書き始めよう。

第8章では、「書き方を学んでみる」ということで、論文に特有の文章作法をお伝えしつつ、実際にそれを学ぶ方法についてもお話ししたい。論文とは、決まった型や構造を持つ文章のかたまりのようなもので、その型や構造を知ることは論文執筆において重要である。しかしながら、型や構造は領域や分野によって異なる場合があり、1つのフォーマットを伝えることは難しい。そのため、この章では総じて書き方を学ぶ方法にも言及することも試みている。

本書の構成

第 I 部 準備編		
第 1 章 卒業論文と向き合う		(提出まで 210 日)
コラム①:卒論とは?		
第 2 章 計画を立ててみた		(提出まで 210 日)
コラム②:研究計画		
第 3 章 研究テーマを考える		(提出まで 200 日)
コラム③:研究テーマの考え方		
第 4 章 先行研究って?		(提出まで 180 日)
コラム④:先行研究の役割と読み方		
第 5 章 調査をする人へ		(提出まで 150 日)
コラム⑤:調査設計		
第 II 部 応援編		
第 6 章 章立てを考える		(提出まで 100 日)
コラム⑥:論文構成		
第 7 章 とりあえず書き始めなさい		(提出まで 70 日)
第 8 章 書き方を学んでみる		(提出まで 50 日)
コラム⑦:パラグラフ・ライティング		
第 9 章 そろそろ出す準備を…		(提出まで 10 日)
コラム⑧:校正の流れ		
補 章 出しても終わりじゃない!?		(提出後)
コラム⑨:発表・口頭試問の準備		

第 9 章では、「そろそろ出す準備を…」まだ考えていない人に向けて書いてある。具体的には、卒業論文を提出する準備にはいろんなことがあり、かつ、それらが結構複雑だということについて淡々と書き記すつもりだ。とくに、「校正」と呼ばれる作業は、ページ数の多い卒業論文にとっては一苦勞であるため、システムティックに進めることをお勧めする。

さいごに、補章では「出しても終わりじゃない!？」という私自身の驚きをきっかけに執筆した。実は、卒業論文は提出だけが終わりではなく、提出後に「口頭試問」や「発表会」を控えていることが多い。そのため、それらの準備もしなければならないのだ。果てしないのである。

加えて、本書には「コラム」を用意している。上記した第 2～9 章 (+補章) は、みなさ

んが「やるべきこと」や「考えるべきこと」を一緒に進めていくスタンスを一貫させている。しかし、そうした「やるべきこと」や「考えるべきこと」は、もっとも概念的な「知識」や「技術」に基づいている。そのため、各章で疑問に思ったことがあれば、そうした「知識」や「技術」を知ることにより理解が深まると思われる。

「コラム」では、そうした（卒業）論文の執筆に関する「知識」や「概念」を紹介してくれているのだ。「コラム」の内容は名古屋大学附属図書館中央図書館サポートデスクの院生スタッフが開催している「卒論講座」に則っているため、そちらもぜひ参加していただくと幸いである。

コラム① 卒論とは？

1 卒論とレポートの違いとは？

4年生になり、新入生の頃よりは大学のレポートに慣れてきたと感じる人も多いのではないのでしょうか。では今までそれなりの数を書いてきたレポートと、これからみなさんが取り組もうとする卒論は何が違うのでしょうか。まずは両者の違いを把握して、ぼんやりとした卒論のイメージを具現化しましょう。

(1) 位置付け

レポートの場合、「授業で学んだことを踏まえて期末レポートを書きなさい」のように講義で学んだ情報をまとめる、知識として定着するという役割を持っています。すなわち、すでにある程度答えのあるものや誰かが知っていることに取り組みます。

一方で、卒論の場合「研究」になります。これはまだ誰にも答えが知られていないことを明らかにするものです。既存の研究蓄積で明らかになっていないことは何か、問題となっていることは何かを把握することから始めなければなりません。

さらに、それを明らかにすることの意義が必要です。たとえ明らかになっていないことでも、それを明らかにすることに意義がなければ、わざわざ研究する意味が説明できません。

(→第3章 研究テーマを考える)

もちろん、「研究」するためには「講義課題」として今まで取り組んできたような作業も必要ですが、レポートのさらにもう一段階上に位置づけられるのが卒論なのです。

(2) 作業時間

レポートと比べ単に字数(枚数)が増えるだけではなく位置付けも異なる卒論は、当然作業時間も長くなります。レポートは課題が提示されてから数週間で仕上げることも珍しくないですが、卒論の場合はそうはいきません。長期戦になるからこそ計画は重要になります。

(→第2章 計画を立ててみた)

卒論をレポートと同じ感覚で取り組んでしまうと、提出際に「間に合わない！」という事態になりかねません。

(3) 問題設定

作業時間が長くなるということは、扱える問題、課題がレポートより大きくなるということです。しかし、いきなり大きな問題に取り組むのではなく、大きな問題を小さな問題に分け、それぞれの答えを出し最終的にこれらを積み上げて大きな問題に対する答えを出す

というのが卒論です。(→第6章 論文構成)

(4) 作業

続いて作業ですが、レポートの場合は基本的に個人で行います。しかし卒論は指導教員と共同作業で取り組みます。もちろん先生が自分の代わりに書いてくれるということではありません。これはテーマ決めや資料調査など執筆前段階から教員に進捗状況を報告し、いただいたアドバイスやコメントをもとに進めていくということです。

時には教員だけでなく、同じ研究室の先輩・同期・後輩といった仲間からも意見をもらい励ましあいながら書くことになるでしょう。最終的に書き上げるのは自分ですが、そこまでの道程で悩んだり壁にぶつかったりした時は、遠慮なく周りに相談しましょう。なぜなら「共同作業」で進めるのが卒論だからです。

レポートと卒論の違いはつかめたでしょうか？最後に何を満たせば「論文」になるのか見ていきましょう。

2 「論文」として満たすべき要素とポイント

(1) 不可欠な要素

① 他の研究との関連が明らかである

自分の研究が従来の研究蓄積の中のどこに位置付けられるものなのか、何が新しいことだと言えるのかという点を説明する必要があります。そのためにも適切な引用、参照を行いましょう。

② 「問題」と「答え」が噛み合っている

卒論の最初に、これから取り組む「問題」を提示します。それに対する「答え」を最終的に出せていることが必要です。

③ 根拠が示されている

②の「答え」を出すため、必ず根拠を示しましょう。

④ 専門的かつ厳密な言葉で書かれている

専門用語を適切に使用することはもちろんですが、読む人によって受け取り方が異なる文章にならないようにします。曖昧な表現を避け、誤読されないように書きます。

(2) ブラッシュアップのポイント

① 独創性がある

先行研究との違いが明確で、自分の研究のオリジナリティが伝わるとより良い卒論と言えます。

② 学術的文章として完成度が高い

(1)不可欠な要素の④とも重なりますが、論文らしい言葉遣いで書くように注意しましょう。

③ データの処理が適切である

データは根拠として使うものですので、恣意的に処理してはいけません。またデータを示す図やグラフなども適切に示せるよう工夫します。

第2章 計画を立ててみた（提出まで210日）

2-1. 研究計画を立てなかったら…

研究計画を立てていない場合になぜ困るのか。その理由に関する一例を示したい。

コウスケは大学4年生で、週3で塾講師のアルバイトをしている。授業はほとんどなく、ゼミとキャリア教育だけ受講している。就活はあまり順調ではなかったが、最終面接を来週（6/10）に控えていた。

コウスケのゼミでは、卒業論文を提出する要件として6月に行われる中間発表と10月に行われる進捗発表への参加・報告が課せられている。今年の中間発表は6/20となっていた。

しかしながら、コウスケはアルバイトや就活をこなすなかで、卒業論文には全く時間を割けていなかったのである。進捗としては教員とテーマを相談する段階だったため、未だに問題設定や調査概要などが決まっていなかった。

そうしたなかで、コウスケは無事最終面接を終え、指導教員にメールを送った。

送信先：スズキ先生

お世話になっております。イノウエです。

本日、無事に最終面接を終えることができました。

ひとまず、これから卒論を頑張りたいと思います。

そして翌日、指導教員からの返事が来た。

送信元：スズキ先生

イノウエくん、お疲れ様でした。

卒論頑張ってください。

ちなみに、中間発表で報告する内容は完成しそうですか？

進捗報告をお待ちしております。

コウスケはこの返信に若干の違和感を覚え、年度初めに配布された卒業論文の執筆要綱を確認した。そこには、「中間発表で報告する内容は、①問題背景、②先行研究の課題、③調査について、④得られそうな結論の4つである。これらをA4で3枚程度に記してくる」とあった。

中間発表まで残り 10 日でコウスケは報告内容を完成させることができるのだろうか。

コウスケの話はほとんど筆者（あるいは、その友人）の経験談で構成しているため、フィクションではない。そのような断りを踏まえたうえで、コウスケがこれほどまでにギリギリになってしまった理由を考えていきたい。

ところで、まず確認しておきたいことは、コウスケがスズキ先生の「中間発表で報告する内容は完成しそうですか」という質問に違和感を覚えたことである。そのあとコウスケが要綱を確認していることを踏まえると、彼は「中間発表で報告する内容」をしっかりと把握していなかったことが想像できる。

では、コウスケが締め切り間近まで卒業論文の報告する内容を仕上げていない理由を考えていきたい。もちろん、コウスケが怠惰だったから、という自己責任論に訴えかけることは容易であるが、それでは何も解決方法は見出すことができない。ここでは、卒業論文の計画を立てることに注目しながら、その理由を探る。

前提として、コウスケには確定された予定がいくつか存在する。

第 1 に、週 3 で働いている塾講師のアルバイトである。塾講師の場合、多くは顧客である小中高生の放課後、具体的にいえば夕方から夜にかけて働くことが多い。そのため、週 3 で夕方以降は卒業論文に時間を費やすことは難しい。

第 2 に、週 2 で受講している大学の授業である。ゼミでは卒業論文だけでなく、文献講読や実験報告といったゼミ特有の授業実践が行われることが多い。それに伴い、週のどこかで文献を探し読み、疑問点を考える時間や、実験とその結果を整理する時間などが必要となる。またキャリア教育系の授業は自己分析や企業分析などの課題が多く、それをこなす時間も別で必要とされる。週 2 で受講しているとはいえ、合計では週 6 コマ分（90 分×6 コマ＝540 分：9 時間）程度を大学の授業に費やすだろう。

第 3 に、就活に費やさなければならぬ時間である。不幸にも、筆者は就活をしたことがないため、周りからの話を聞いた印象でしかないが、おそらく週に 20 時間程度は費やしていた。これは印象でしかないが、逆にいえばそれほど忙しいものであることに変わりない。

では、これらの予定を扱うなかで、卒業論文に費やす時間はどこにあるのだろうか。このように問うと、多くの人が「ない」と答えるかもしれない。しかし、図 2-1 を参照していただきたい。これは、コウスケの確定された予定を図示したものである。たしかに忙しい印象を受ける一方で、まとまった時間も散見される。その「まとまった時間」を示したのが図 2-2 である。ひとまず、①～⑤の時間を合計して 9 時間は卒業論文に費やす時間が確保できる。

ところで、①～⑤は概ね 2.5 時間（150 分）～3 時間（180 分）で計算してある。その理由についてここでは 2 点あげておく。

1 点目に、30 分×○コマや 90 分×○コマというように準備しておけば、普段受けている授業の時間が 30 分×3 コマや 90 分×1 コマであるため、日頃から慣れている授業時間を基

	月曜	火曜	水曜	木曜	金曜	土曜	日曜
8:00							
9:00							
10:00							
11:00					授業		
12:00	就活準備			就活準備			就活準備
13:00							
14:00		ゼミ準備	ゼミ				
15:00							
16:00							
17:00							
18:00	塾講師			塾講師	塾講師		
19:00							
20:00				就活準備			
21:00							
22:00				授業準備			
23:00							
0:00							

図 2-1. コウスケの予定

準にすることで、どのくらいの作業が可能であるか、あるいは、どのくらいで集中が切れるかを予想することが簡単だからである。

2点目に、1点目とも関連するが、普段受けている授業の時間であれば、時間割の1コマとして扱うことができ、スケジュール管理（一例として履修一覧に組み込む）が非常に楽になるからである。

話を戻そう。こうした1週間の計画を立てておけば、コウスケはある程度の進捗を得ることができたのではないかと考える。しかし、これだけでは確実な進捗を得られない。なぜなら、仮に①～⑤を確保できたとしても、そこで何をやるのかを明確にしなければ、だらだらと時間を消費してしまうだけだから。

ここにもう1つの計画を立ててみたい。それは、日程ではなくタスクに関わる計画である。この点についてはコラムで詳しく述べるので、ここではコウスケの中間発表を例として簡単に触れておく。

まず、コウスケの中間発表では、①問題背景、②先行研究の検討、③調査概要、④得られそうな知見を報告することが求められていた。これらを報告するためには、(1) テーマ決め・先行研究の整理、(2) 実際の調査(の準備)を始めなければならない。そのため、図3に示すように、(1)の2つと(2)の1つで合計3つのタスクを遂行できるような計画が必要となる。

また、このような計画を立てておけば、何を報告しなければならないのか、ということも

	月曜	火曜	水曜	木曜	金曜	土曜	日曜
8:00							
9:00							
10:00							
11:00		①	③	就活準備	授業	⑤	就活準備
12:00	就活準備						
13:00							
14:00		ゼミ準備	ゼミ				
15:00							
16:00							
17:00			④				
18:00		②		塾講師	塾講師		
19:00	塾講師						
20:00							
21:00			就活準備				
22:00				授業準備			
23:00							
0:00							

図 2-2. コウスケの予定から推測される空いた時間

必然的に確認できるため、直前になって思い出す、といったハプニングはほとんどなくなるだろう（それでも忘れていた時は仕方ないものである）。

このように、コウスケは「日程」と「タスク」という2つの側面から卒業論文の計画を立てておかなかったことが、直前になってバタバタした原因なのではないかと考えられる。

2-2. なぜ計画を立てるのか

以上で見えてきたように、卒業論文を進める上では計画を立てることで何かとスムーズに作業が進んでいく。ここでは、改めて計画を立てることが必要な理由を説明しておきたい。

まず、研究計画を立てることによって、卒業論文の完成に向けた進捗状況を可視化でき、他のスケジュール・タスクとの兼ね合いを考えやすくなることが理由として挙げられる。卒業論文の完成は時間を要するため、他のスケジュール・タスクとの兼ね合いを考えながら、コツコツ進めていくことが要求される。

卒業論文に限らず、長期的なプロジェクトでは「どのくらい進めたのか」「これから何をやらなければならないのか」という問いが付き纏う。その問いをクリアにするためには、他のスケジュールとの関係も無視はできない。

そこで、現在の進捗状況を明確にするとともに、今後の進捗予定も研究計画によってマネジメントすることは、卒業論文の完成に向けて大きな武器となる。

次に、卒業論文が長い時間を要することとも関連して、急用ができた、あるいは病気になった場合、計画に余裕があれば長期的に軌道修正することが可能であり、完成における支障がないことが挙げられる。

逆に言えば、計画に余裕がない場合、何らかのアクシデントが起きてしまえば、提出そのものにも影響を及ぼしかねない。実際、筆者の周りでも、毎年1名以上は冬に流行する風邪やインフルエンザに罹ってしまい、しんどい思いをしながら提出に間に合うよう必死に執筆している姿がある。可能であれば、そうした事態は避けたい。

最後に、これは卒業論文が「研究」であるからこそその理由なのだが、研究方法によっては資料やデータの収集、あるいはそれらの分析に多くの時間を費やすため、執筆時間を圧迫させてしまうことが多い。そのため、研究計画はそうした作業同士の調整役を担うことが可能である点が必要な理由として挙げられる。

例えば、筆者は新聞記事の分析をするために朝日新聞と読売新聞の記事を収集する予定を6月から8月の2ヶ月として設けていた。しかしながら、実際にかかった時間は6月から9月であった。そこから分析を精緻化し、しっかりとした議論を書き始めたのは11月の初旬であったことを覚えている。

資料収集は、事前に資料の数がわからないと尚更、予定した時間を超過するが多い。そのため、研究計画がなければ、完成度を維持しつつ提出日に間に合わせることは難しくなるだろう。

以上の3点が研究計画を必要とする理由である。改めて整理しておくと、①他のスケジュール・タスクとの兼ね合いを考慮することができるから、②急な予定変更にも対応することができるから、③時間を要する作業があっても完成度を維持しながら提出に間に合わせるすることができるから、である。

では、研究計画はいつ立てるべきなのだろうか、あるいは、立てたものを変更してもよいのだろうか、次節ではこれらの問いを考えていきたい。

2-3. いつ計画を立てるのか

研究計画を立てる時期は、やはり「可能な限り早く」である。一世を風靡した「今でしょ」という言葉は、常に学生にとってのモットーなのだ。とくに、これを読んでいる大学4年生はすぐにでも提出日を調べ、逆算的に計画を立ててほしい(立て方についてはコラム②を参照されたい)。

ただし、ここで重要になってくるのは学年というよりも、提出日から逆算して現在が何日

前、あるいは何ヶ月前であるか、ということである。もし今読んでいる時がその1年前であるならば、そろそろ計画を立てながら進めた方が良いだろう。

一方で、1年半前であるならば、計画を立てなくてもよいし、卒業論文のことよりも目の前のレポートや試験に全力を尽くしていただきたい。筆者から伝えたいのは、おおよそ9ヶ月前頃から計画をしっかりと立てて進めてほしいということだ。

そのように準備した研究計画だが、進行中に変更を余儀なくされることがあるだろう。その際には、全く気にすることなく変更してもよい。計画とは見直しながらゴールへと自身を導くためのツールだからだ。

しかし、計画を変更する際のちょっとしたルールを初めに決めておくとも良いかもしれない。例えば、毎月のようにタスクの計画を変更していくと、そのうち提出締め切りまでの余裕がなくなってしまう。そのため、タスクの計画変更は2回までとか、タスクに関する個人的な締め切りをズラしてよい時間は3週間までとか。

そのようなルールを設けておくことで、結果的に卒業論文の提出締め切りに間に合わせることができるだろう。計画に縛られすぎないように注意しつつ、締め切りに間に合うように計画を進めてほしい。

	4月		5月		6月	
	前半	後半	前半	後半	前半	後半
(1) テーマ決め						
(1) 先行研究の整理						
(2) 実際の調査 (の準備)						

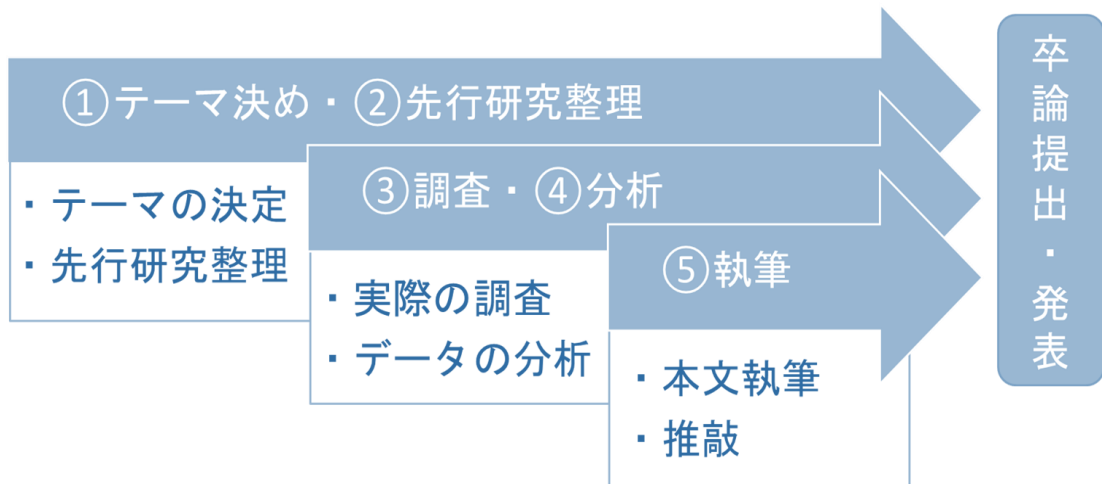
図 2-3. 計画の立て方

コラム② 研究計画

1 研究計画って何だろう？

卒論を書くにあたり「計画が大切だ！」ということは感じていただけたと思います。では具体的にどのように計画を立てれば良いのでしょうか。詳細なスケジュールは専門分野によって異なりますが、ここでは大まかにどの分野でも共通する計画の立て方を説明します。

(1) 卒論提出までに行う主な作業



図②-1. 卒論提出までの流れ

①テーマ決め ②先行研究の整理 ③調査 ④分析 ⑤執筆

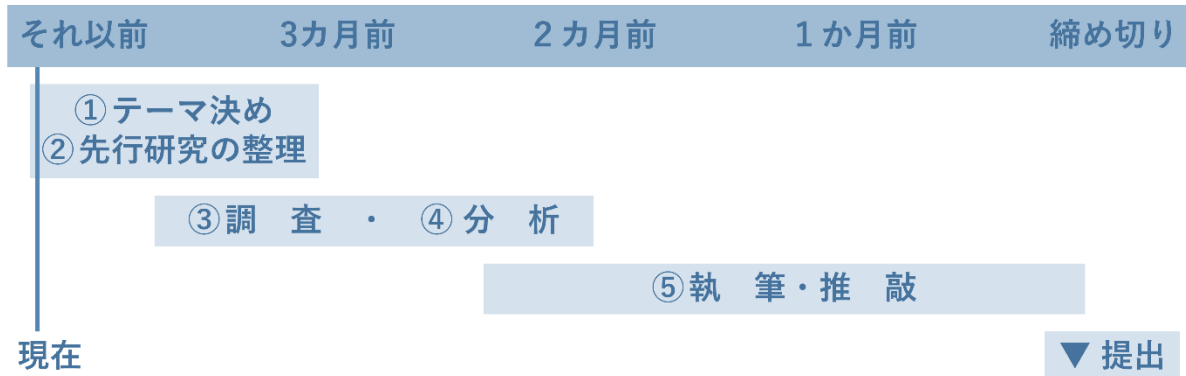
図1で示したように、これらの作業は1つが終わったら次の作業というわけではなく、並行して行う場合もあります。ここで注意したいことは、いつまでも③調査・④分析がおわらず次の⑤執筆に進めないという事態に陥ることです。

同時進行で作業しつつ提出までに完成させるためにも、締め切りから逆算して「いつまでに〇〇を終わらせる」という計画を立てることが必要です。

(2) 卒論の計画例

図2は、ある分野の計画例です。分野によって各作業にかかることのできる期間、並行して作業することが許される期間は異なるため注意してください。そのため、詳細な計画については各自の研究室の先輩や先生に聞きましょう。

しかしどの分野にも共通して言えることは、締め切りから逆算して計画を立てることです。逆算することで全体の流れを把握し、いつまでに何を終わらせるのか決めておきましょう。



図②-2. 卒論の計画例

計画を立てる際、取り入れたいポイントは3つあります。

1つ目は計画を立てる際に、指導教員との打ち合わせを目安にすることです。○月○日に打ち合わせがあるから、その時までには第○章を書き上げようとか、打ち合わせで指摘された◇◇については1週間以内に解決しようなど、打ち合わせ日程や内容を軸に計画を詰めていくと具体的になります。

2つ目はマイルールを決めることです。例えば文献の管理方法として、オンラインの文献管理ツールを使うのか、紙媒体のものはPDFにするのかなどは初めに決めておいた方が良いでしょう。卒論の最後に参考文献一覧を作る際に、慌てずにすみます。またどこで作業するか、休憩はいつとるかなども決めておくと、ダラダラ時間だけ過ぎてしまうというのを防げます。

3つ目は実現可能性のある計画を立てることです。計画である以上、なかなかその通りには進まないこともあるでしょう。しかし、ある程度実現可能な計画でなければ、立てる意味がありません。もちろん上手くいかなかった時に修正ができる、余裕のある計画を立てられると良いです。しかし何よりも気をつけたいことは、あまりに無謀な計画にならないようにすることです。以上が、自分の中で最低限として立てておきたい研究計画です。

次に、指導教員とも共有する「研究計画書」について説明します。「研究計画書」は初めて書くという人も多いと思います。ここでは問題意識、研究目的・課題、先行研究の整理、研究方法などを書きます。このような内容をまとめるためには、自分が取り組みたいことを漠然としたものから、ある程度具体的にしなければなりません。そのため、研究計画書を作ることは大変ではありますが、頭の中を整理することができます。また計画書ができれば、

指導教員や先輩に説明する際にも役立ちます。

さらに研究を進め、データや資料が集まれば、卒論の構成内容についても簡単にまとめてみましょう。章ごとの簡潔なメモでも構いません。論理（ロジック）を可視化することで、論じる順番が適切かどうか、根拠として示すデータは十分かどうかが明らかになります。

第3章 研究テーマを考える（提出まで200日）

3-1. 研究テーマとは？

「研究テーマとは何か？」

卒論を書き始める学生にとって結構悩ましい問いの1つがこれである。指導教員から「君の研究テーマはなに？」と聞かれたり、中間発表で「研究テーマと内容が一致していないのでは」と先輩からコメントされたりすることがしばしばある。こうした問題に直面したときに気になるのが、そもそも研究テーマとはなんだろうか、という疑問である。

ただし、筆者もこの疑問に対する明確な回答を持ち合わせていない。同時に、(筆者が読んできたなかで) 卒論を概説している参考書も回答がバラバラである。そのため、以下ではこの問いについてみなさんと考えてみたい。(それゆえに、本章のタイトルである「研究テーマを考える」とは、具体的に「研究テーマ」を考えることと、「研究テーマ」という存在を考えるという二重の意味を有している。) そうすることで、明確な答えは得られないにしても、研究テーマに対するイメージを共有することはできるだろう。

とはいえ、何も手がかりなく始めるのは難しいため、ここではしばしば登場している筆者の卒業論文について触れてから研究テーマを考えていきたい。

筆者の専門は教育社会学と呼ばれる学問であり、教育学部で受けられる授業に位置付けられるものである。卒業論文では、【学校外である世間では「教師の力量」がどのように認識されているのか】という問いを明らかにする研究を行った。

この研究のテーマは、【「教師の力量」に関する社会学的研究】である。学部生だった筆者は、教職課程を目指していたが、その途中で教師に向けられる世間からの批判に疑問を持ち、教職課程を断念した。

それは同時に、「教師」という存在を様々な角度から捉え直し、理想の教師像のようなものを変えたいという欲求を筆者に与えた。そして、先行研究等を読んでいる間にわかったのは、教職課程で学ぶような「教師の力量」は数多く明らかになっているのに、世間が求めている「教師の力量」は科学的に研究されていないことであった。

教師を批判する際に用いられる「教師は力量が足りない」「教師力をもっと身につけるべきだ」といった語りでは、何を「力量」「力」としているのか。

このような問いを明らかにすることが必要だと感じ、上記の問いを設定した。

まず、筆者の研究テーマは【「教師の力量」に関する社会学的研究】である。これは、筆者が①「教師の力量」について(研究対象)、②社会学的な視点から(方法論)、研究するこ

とを示している。

つまり、研究テーマとは「何についてどのように研究するのか」を簡単に紹介するものだと考えて良いだろう。もっとも、「何について」研究するのかを書くときに、どの程度具体的に書くのか、そのバランスは難しい。筆者の場合、【世の中が認識する「教師の力量」に関する社会学的研究】でも伝わるが、それでは限定的になってしまう。

一方で、もう少しわかりやすく説明するならば、研究テーマとはタイトルのようなものである。これは次項でも説明することだが、研究テーマは決して疑問形で書かれるものではなく「～について」という形で書かれていることが特徴である。「～について」研究する、ということを示すのが研究テーマなのである。

3-2. 研究テーマは研究課題と何が違うのか？

では、研究テーマと研究課題は何が違うのだろうか。

ここで確認しておきたいのは、研究課題は研究テーマと違って疑問形で表される点である。筆者の卒論に話を戻すと、そこで設定された研究課題は【学校外である世間では「教師の力量」がどのように認識されているのか】という問いである。一方で、研究テーマは特に疑問形になっていないのである。

さらに、研究テーマが定まったとしても、研究課題は課題の大きさに応じて細分化させなければならない。先の筆者の研究課題は以下のように細分化することが求められる。

研究課題【学校外である世間では「教師の力量」がどのように認識されているのか】

細分化課題①「学校外である世間とは何か」

細分化課題②「世間の人々は「教師の力量」をどのように表現しているのか」

細分化課題③「「教師の力量」が表現されるときに意味する「力量」とは何か」

細分化課題④「なぜ③で明らかになったような意味をもたせようとするのか」

このように細分化することで、明らかにしたい大きな 1 つの結論を導き出すことができる。逆に言えば、大きな結論を導き出すために必要な課題をいくつか考え出すことが研究課題を考える上では重要な作業になる。

ここで 1 つの図を紹介しておきたい。次のページに掲載している図 3-1 は、酒井聡樹著 (2017)『これからレポート・卒論を書く若者のために』という本の中で紹介している「主張の構造」というものである。この図をみると、ある主張と主張が 1 つの結論を導き出している。すなわち、卒論における結論というものは、いくつかの未発見事実に対する主張の積み重ねによって得られるものなのである。

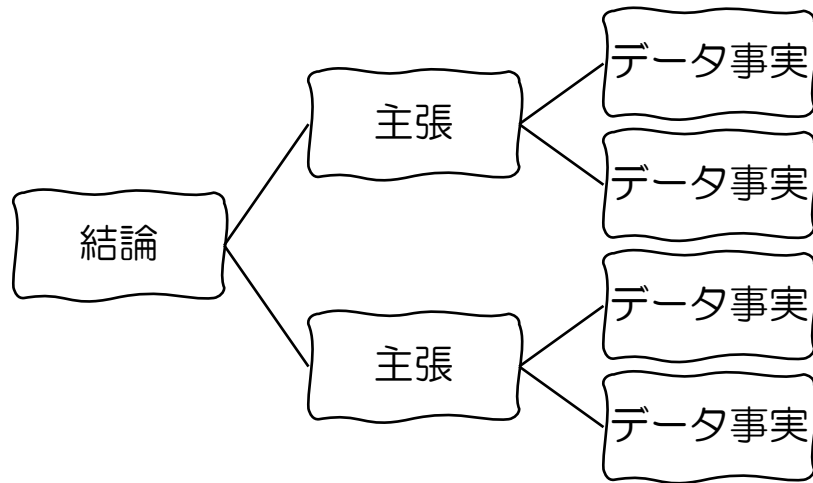


図 3-1. 「レポート・卒論における主張の構造」
(酒井 (2017) の図を筆者が加筆・修正したもの)

ここでは研究テーマと研究課題の違いを確認したが、実際に研究テーマを疑問形にする方法についてはコラムを参照していただきたい。

3-3. 研究テーマを決めたきっかけ

ここで、これまでの先輩方がどのようなきっかけで研究テーマを決めてきたのかについて、アンケートの結果を簡単に紹介しておきたい。

まず目立ったのは、「研究室で与えられた」ということである。とくに、理系の場合はその傾向が強いようだ。例えば、「研究室配属時に先生からいくつか提示されたテーマのうち興味のあるものを選んだ」「先輩が取得した遺伝子のデータの再解析を行った際に今までにない発見があったから」といったように、研究室の先生、あるいはその研究室の先輩の研究を契機に研究テーマを決めたということだ。

次に、「授業で扱ったから」ということが研究テーマのきっかけになっていることがある。以下の内容は、何名かの方が、「授業で扱った」ことが研究テーマに出会うきっかけになったその経緯について回答したものである。ただし、回答そのもののコピーではなく、筆者によって趣旨が損なわれないように加筆・修正したものである。

学部の講義で生殖中枢に関する講義を受けた際に面白いと思ったから。

以前から、Zeta 関数や素数にまつわる未解決問題「Riemann 予想」を取り挙げた創作物に触れており、Zeta 関数や Fourier 解析について、学部四年の少人数クラス（研究室）において両者の関係に触れ興味を持った。そこで、更に掘り下げて調べたところ、Fourier 解析を用いて Zeta 関数のある特殊値を Bernoulli 数という概念からなる公式で表現できるという事実を知った。そこで、公式導出に必要な最小限の情報を調べて、自ら証明を考えてまとめ上げることにした。

このように、授業で扱った内容に興味関心をもった、あるいはそこでさらに知識を深めるなかで新たな発見があったなど、授業での出来事がそのまま研究テーマへと直結しているケースも多いようだ。一方で、「日常における発見」において研究テーマが見つかったという方もいた。以下の回答は、そうして研究テーマが見つかった方のものである。

3 年生前期で、定量的な論文をきっかけにミクロ経済学、統計学などを勉強していた。その過程で定量的な論文で卒論を書きたいと思うようになった。3 年 8 月にテーマを決める際に、いきなり論文を読むのは内容が詳細すぎて、テーマを決めるのに不向きだと思ったため、Google Scholar などで書評をよんで、面白そうだった本を中古で購入したり、図書館で借りたりして読んでみることにした。私はとある教育経済学の本に出会ったことで幼児教育の重要性に気づき、これに関する実証分析を行うことにした。

愛知県美術館で開催された「コートールド美術館展」に興味を持ち、同展覧会を取り上げたテレビ番組でその研究動向が紹介されており、自分でも調べたくなったから。

以上のように、卒論の研究テーマをどこで発見するのか、あるいは与えられるのかは人それぞれであり、とくに「研究室」「授業」といった場において得ることが多いかもしれないが、そこから「図書館」や「メディア」に派生して発見する人もいた。

そうした事実から見えてくるのは、研究テーマになりそうなネタは意外と身近に存在しているため、まずはいくつかピックアップし、それらを研究テーマとして昇華させていくなかで取捨選択するのも 1 つ 1 つの手立てなのかもしれない。

コラム③ 研究テーマの考え方

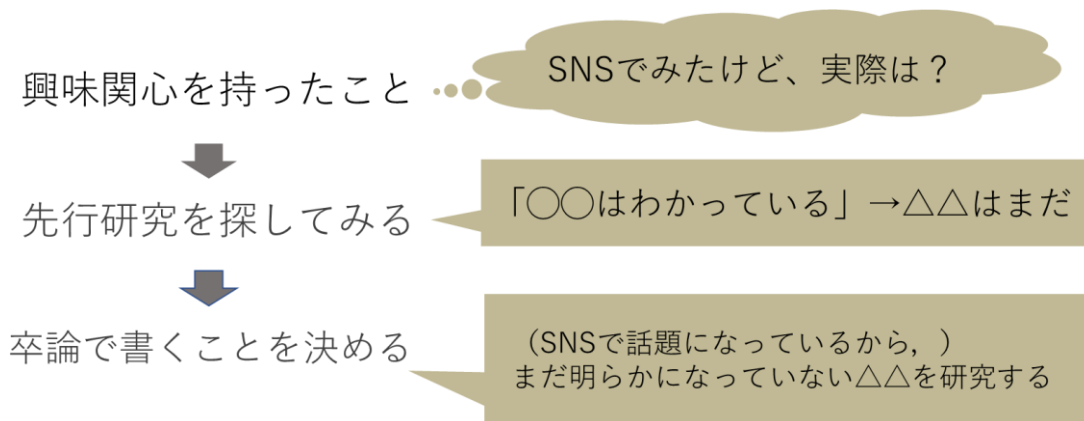
1 「テーマ」を見つける

第1章でテーマの選び方を2つ紹介しました。1つは「指導教員の専門分野に近いもの」、もう1つは「自分が興味関心を寄せているもの」です。ここでは2つ目の「自分が興味関心を寄せているもの」をテーマにする方法を紹介します。

まずは興味関心のある事柄をいくつか挙げていきます。最近読んだ本に書いてあったこと、SNS で目にしたこと、友達と話していてこれってどういうことなんだろうと疑問に思ったことなど、意識して思い出してみましょう。

また今まで受講してきた授業ノートを振り返る、自分の書いたレポートを見直すといったことから、「何かひっかかる」「気になる」事柄が見えてくるかもしれません。できるだけ多く挙げると、自分にとって興味のある内容の傾向がより明確になります。

次に、興味関心のある内容を卒論で書けそうなことかどうかという観点から絞っていきます。例えば入門書を読んで基礎知識を身につけ、さらに先行研究を探し、すでに何がわかっていて何が課題として残されているのかを把握します。課題を見つけることができれば、それを研究テーマにしましょう。



図③-1. 興味からテーマへ

2 「テーマ」を「問い」にする

テーマを決めたら、次に「問い」の形に変えていきます。テーマは「○○について」と表

せるもので、問いは「○○とは何か」という疑問形で表すものです。例として4つの問いを立てる方法を紹介します。

(1) 先行研究の不整合を解決する「問い」

ある問題に対して、先行研究でA説とB説の異なる考え方が存在する場合、この不整合を解決するために「問い」を立てます。どちらの説が正しいかという答えを出す問いではなく、○○という条件だと△△になるというように、より厳密な答えを求める問いの形にすると良いでしょう。

(2) 先行研究の限界を解決する「問い」

先行研究を読んでいくと、まだ課題として残されている部分や条件・状況を変えると先行研究の結果だけでは説明が不十分な箇所などが見えてきます。その場合、まだ先行研究で明らかになっていないことを「問い」にすることができます。

(3) 概念や理論の共通点や相違点から生まれる「問い」

概念や理論というと自分の意見を補強するために使うイメージがあるかもしれませんが。一方で自分の気になる事象が、すでに確立している概念や理論では説明できない！という場合、概念や理論そのものを捉え直すことを「問い」にすることができます。

この場合も、100パーセント既存の概念や理論では説明できないということはないでしょう。気になる事象と既存の概念の相違点だけでなく共通点も丁寧に見ていくことで、適切な「問い」の形に仕上げていきます。

(4) 自分の経験から生まれる「問い」

論文や研究書で明らかにされていることであっても、自分の体験を振り返ると必ずしもその通りだと言えない、そんな経験はありませんか？

このような自分の実体験と学問的知見とのギャップを「問い」にするということも可能です。なぜギャップが生じているのか、自分の経験は学問的にどのように分析できるのか等の観点から「問い」を立てます。

3 「問い」の大きさ

「問い」を立てたら、その大きさを調整しましょう。卒論は締め切りがあるので、期限内に調査や考察、執筆までを全て終わらせなければなりません。研究する場所や対象が広いほど難易度は上がります。

例えば、「ポイ捨てが多い国の文化とは」という問いでは、まず「ポイ捨てが多い国」全

てを挙げ、それぞれの文化を比較や考察することになり調査や作業だけで膨大な時間がかかります。少し範囲を狭め「日本におけるポイ捨ての多い地域の特徴とは」という問いにしたとします。国を日本に限定することで先ほどよりは研究対象が少なくなります、「ポイ捨ての多い地域」を全て拾い上げ、それぞれの地域の特徴を明らかにすることは難しいでしょう。

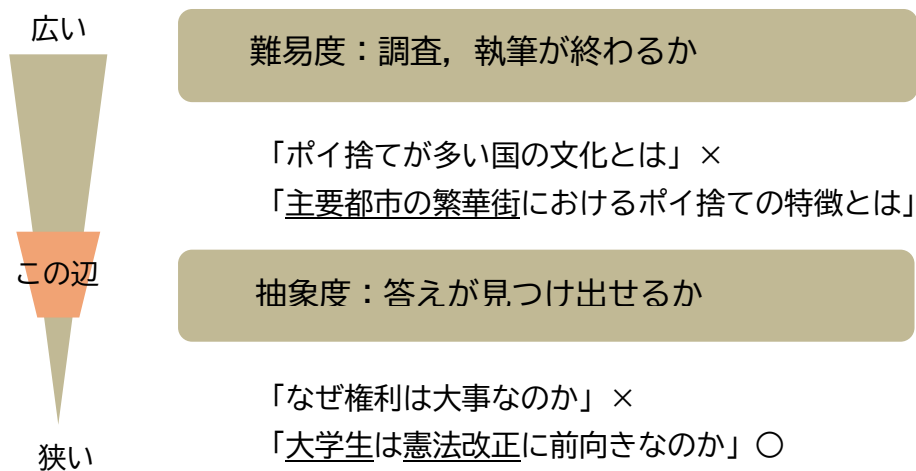
そこで「主要都市の繁華街におけるポイ捨ての特徴とは」というところまで「問い」を小さくします。そうすると調査する場所がより具体的になり、「答え」の收拾がつかないという状態になることを避けられます。

「問い」の大きさは、「答え」の抽象度にも関係します。一般的に大きな「問い」を立てるほど導き出される「答え」は抽象度が高くなります。具体的な「答え」を得るためには、概念や対象を絞ることが必要です。

例えば「なぜ権利は大事なのか」という問いでは、具体的な権利の種類や権利を行使する人物・場面など考察すべき対象項目が多くなり、「答え」も抽象的にならざるを得ません。そこで「大学生は憲法改正に前向きなのか」という問いに狭めたとします。対象となる人物を「大学生」に限定し、「権利」に関しても「憲法改正」という具体的な事象を考察することになります。

このように「問い」が具体的になればなるほど、「答え」も具体的になると言えます。ただし、「問い」を狭めすぎると卒論として相応しくなくなる場合もあります。例えば、「名古屋大学教育学部生は憲法改正に前向きなのか」という問いでは、対象となる人物が狭くなりすぎるため、なぜその範囲で研究するのかという意義が説明しにくくなります。研究意義については、後ほど詳しく説明します。

このように「問い」を立てる際、調査対象や扱う概念をどこまで絞るかについては、難易度と抽象度の観点から調整が必要です。



図③-2. 問いの大きさ

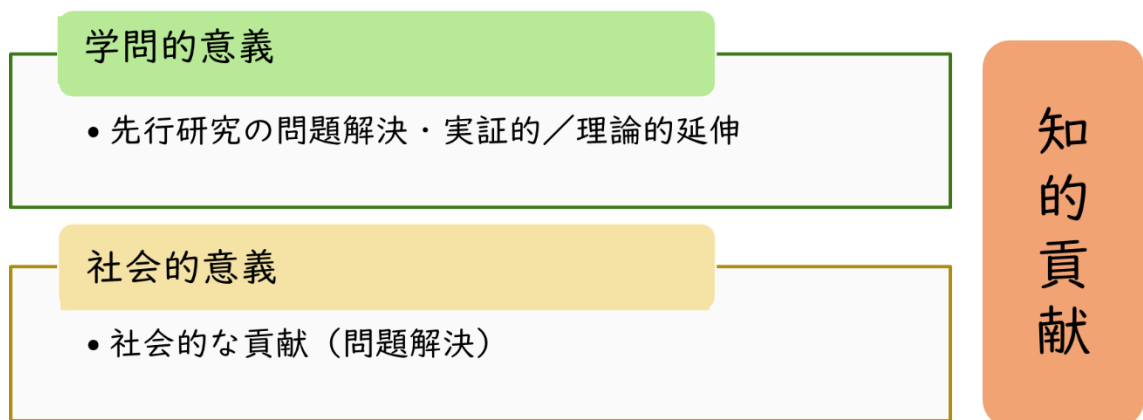
4 研究意義

研究は単に自分の好きなことをすれば良いのではなく、その成果を何かしらに貢献するものです。ここでは考えるべき研究の意義を大きく2つに分けて説明します。

1つ目は「学問的意義」です。先行研究がどこまで何を明らかにしているのかを把握し、その上で先行研究が見落としている事象を考察対象としたり、先行研究の問題解決方法とは異なる方法からアプローチしたりするなどします。つまり先行研究の不足分を補うことで、その研究全体を前進させることが「学問的意義」です。

2つ目は「社会的意義」です。これは設定した「問い」を解決することで、社会に貢献することを指します。「問い」に答えることで自分が満足して終わるのではなく、そこで得られた成果が他の人や社会全体においてもプラスになることでその研究は「社会的意義」があると言えます。

自分の研究における意義を簡単に説明することは難しいかもしれませんが、ぜひ皆さんが自信をもって説明できるよう、知的貢献を意識して「テーマ」そして「問い」を立てていきましょう。



図③-3. 学問的意義と社会的意義の違い

第4章 先行研究って？（提出まで180日）

4-1. 先行研究はどこで使われているのか

先行研究という言葉は卒論を書く中でずっと聞く単語かもしれない。そこで本章では、先行研究がいかなるものかを確認する。ただし「先行研究とは○○のようなもので」と説明してもわかりづらいことが多い。なぜなら、論文のなかで先行研究には様々な用途があるからだ。そこで、まずは先行研究がどこでいかに使われているのか、その実例をみていきたい。ここで扱う実例はサポートデスク公式 note『【卒論アドバイス⑥】先行研究の立場、その整理と研究へのつなげ方』（2023年7月1日確認、https://note.com/nulibss/n/n4267665cee7?magazine_key=mef8c66147bbb）に掲載したものと同一である。

みなさんの思い浮かぶ有名な研究として、コペルニクスやガリレオの地動説、プトレマイオスの天動説、ダーウィンの進化論、メンデルの法則、ワトソンとクリックのDNA二重螺旋構造、メンデレーエフの周期表…などが思い浮かぶでしょうか。

例えば、1860年代当時に発見されていた元素を原子量の大きさや性質が似たものが並びようにまとめられたものがメンデレーエフの周期表でした。メンデレーエフは当時未発見だった元素の存在とその性質を周期表から予測しておおよそ中させています。

これより前に元素を一覧にまとめた表がなかったわけではありませんが、元素の性質と周期表の空欄部分に注目したところに、メンデレーエフの周期表の新しさがあります。

このメンデレーエフの周期表は、この後発見された希ガスなどの元素が追加されたり、順番が原子量の大きさではなく原子の核の正電荷の数になったり…と研究が進むにつれて発展して今の周期表になっています。

一方で、文系学問においても最近出版された教科書で確認できる概念や理論は、周期表と同様に、先行研究の積み重ねによって発展してきたのです。

ここで紹介しているのは、みなさんがよく耳にするような概念や理論が、歴史的にみると研究の積み重ねによって誕生しているということである。メンデレーエフの周期表は、中学校の理科の授業で目にした方も多はずだ。その周期表も、メンデレーエフ以前に似たようなものがあり、それ以後にも追加されて、研究が積み重なるごとに更新されたものなのである。

一方で、文系学問においてもそうした発展があることを示しておきたい。ただし、取り上げるテーマについて、筆者の偏りがあることはご了承ください。

みなさんは「社会問題」と聞くと何を思い浮かべますか。「公害」や「援助交際」、「戦争」「非正規増加」など、社会におけるあらゆる問題があげられると思います。

では、「社会問題」とは何でしょうか。ここでは、それっぽい回答として「大多数の人びとが好ましくないと思う状態」のものを「社会問題」として定義しておきたいと思います。社会問題を研究する人は、その定義に従って「社会問題」を考えようとしています。



これに対して、社会学者であるマートンは、そうした定義では多くの人びとが気づいていないような社会問題が見逃されると批判します（1963=1967）。そしてマートンは、人びとは別なる次元で、社会学者が社会問題であるかどうかを判断すべきだという方針を提示します。その方針は規範的に望ましいかもしれませんが、どれほど社会問題を拾うことができるのか、そもそも社会学者にそのような能力が備わっているのかという問題が生じます。

一方で、「社会問題」とはそもそも人びとの活動によって“作られるもの”であるという見方を出す社会学者が登場します。スペクター&キツセ（1977=1990）は社会問題が人びとによる「クレイム申し立て活動」によって構成されることを提示し、社会問題を研究するにはその活動に焦点を合わせなければならないというのです。

こうしてみると、マートンの頃には、あたかも社会問題とされる事柄がすでに存在していて、それが社会問題であるかどうかを見極める必要がありました。しかし、それでも取りこぼしてしまうものはあります。そこで、スペクター&キツセが提示したのは、人びとが「社会問題である」と訴えるところに社会問題を見出すという考え方でした。

「社会問題」をどのように扱うのかをめぐる社会学における議論の系譜を紹介したが、ここでは次の2点に注目してほしい。

1点目に、マートンとスペクター&キツセは社会問題を扱う研究であることに変わりないが、どこに相違点があったのだろうか。

2点目に、スペクター&キツセによる「クレイム申し立て活動」という発想は、何をヒントに生み出されたものなのだろうか。

1点目については、文章中から答えを導き出すことができる。それは、「社会問題」がどのようにして発見されるのか、そのプロセスが全く違う点である。マートンの場合、社会問題はすでに存在しているものであり、人びとや社会学者が「発見」することで初めて議論の俎上に載せることが可能となる。

一方で、スペクター&キツセの場合、社会問題は人びとの活動のなかで「構築」されるものであり、そこで構築されることで初めて「発見」され議論が可能になる。

このように「社会問題」をどのように理解するかということでも先行研究で大きく異なる

場合がある。そして、マートンとスペクター&キツセのように、昔の研究が成しえなかったことを達成するためにアップデートされるからこそ、そもそも物の見方が変わることもある。

では、こうした見方の変化をスペクター&キツセはいかに成し得たのか。これは2点目にかかわる話である。ただし、これを整理するには研究論文1本に相当する分量と労力が必要であるため、詳しくは中河伸俊著『社会問題の社会学』や上野千鶴子著『構築主義とは何か』を参照いただきたい。

とはいえ、社会学に全く縁のない方もいるため、ここでは簡潔に述べておく（社会学者からの非難を承知で書くため、社会学に少しでもご縁のある方はすぐ読み飛ばしていただきたい次第である）。

スペクター&キツセが「クレーム申し立て活動」にたどり着く前に経由したのは、「ラベリング理論」である。「ラベリング理論」において、社会で逸脱する（犯罪や非行など）者を社会の人びとが識別できるのは、逸脱したかどうかをその都度判断しているからだという当たり前のことから話が始まる。ここで判断の基準となっているのは、「逸脱」に関する定義だろう。

しかし、「ラベリング理論」の面白いところは、この定義が変われば、逸脱したかどうかの判断も変わり、逸脱者という存在規定すら変化してしまうと考える点にある。つまり、そうしたプロセスにおいて、逸脱者とは「逸脱」というレッテルを貼られるからこそ社会的に存在することが認められるのである。

こうした考え方が「ラベリング理論」であり、スペクター&キツセはこの考え方にヒントを得ながら、「クレーム申し立て活動」にたどり着くのである。

このように、スペクター&キツセは社会問題に関する先行研究をよりよいものにすることを目指し、「ラベリング理論」のような先行研究を参照していたのである。

4-2. 先行研究とは何だったのか？

それでは本題に戻ろう。先行研究とは何か。

例えば、前節の最後に「スペクター&キツセは社会問題に関する先行研究をよりよいものにすることを目指し」と書いたが、基本的に研究とは先行研究を土台にし、その上に積み重なっていくものといえる。このことを、しばしば「巨人の肩に乗っかる」といった言葉で表現することもある。

余談だが、「Google Scholar」という論文検索サイトの一番はじめのページには、「巨人の肩の上に立つ」と書かれている（2023年8月現在）。

つまるところ、先行研究とは自分の研究の土台であり、それは我々の研究によって「発展

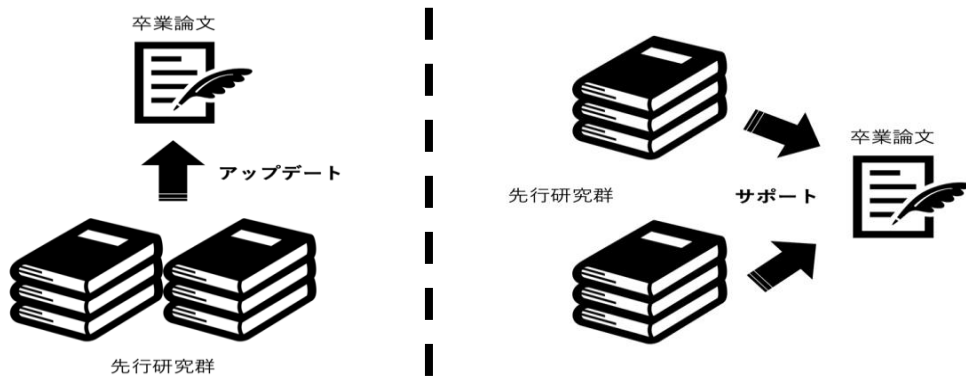


図 4-1. 先行研究と卒業論文の関係

(左：発展するものとして／右：ヒントになるものとして)

する」ものだといえる。また卒論を書くみなさんにとっては、「ヒント」になるものであるともいえよう。

まず、「発展する」ものとしての先行研究は、しばしば「仮想敵」と呼ばれるように、自分の研究が乗り越えるべき課題を見出す場所として理解される。さらに、先行研究が何らかの課題を抱えているだけでなく、学術的または社会的にそれが乗り越えられる必要があるとき、「自分の研究はそれを乗り越える点で意義がある！」といえるようになる。

そのため、自分の関心に近い研究に関しては、人一倍読んでおき、何が課題なのか、それを乗り越えるとなぜ意義があるのかを考えていくとよい。

一方で、「ヒントになる」ものとしての先行研究は、いうなれば自分の研究のモデルケースとして理解される。それが「方法」としてのモデルなのか、「考え方」としてのモデルなのか、どういった点でモデルになるのかにはいくつかのパターンが想定できるだろう。

例えば、ある文学作品の解釈をする際に、別の文学作品の解釈をしている研究は「方法」としてのモデルになる場合がある。あるいは、中学生がなぜ鬱になるのかを実証的に示す場合、おそらく類似する研究を参照して鬱という現象を捉える際の「考え方」を参考にすることもある。ただし、そうした「ヒントになる」先行研究は、自分の関心とは離れている場合が多いため、幅広く先行研究を漁ってみる必要がある。

4-3. 先行研究はどこで探すのか

ここまで先行研究とは何だろうという問いについて考えてきたが、実際これを読んでいる方の多くが直面しているのは、「そもそも先行研究ってどこで探すのか」という実践的な問題である気がしてならない。それゆえ、本章の最後として、ここでは先行研究の探し方について、かなり具体的な話をしておきたい。

先行研究の探し方は、大別すると3つある。



図 4-2. キーワード検索

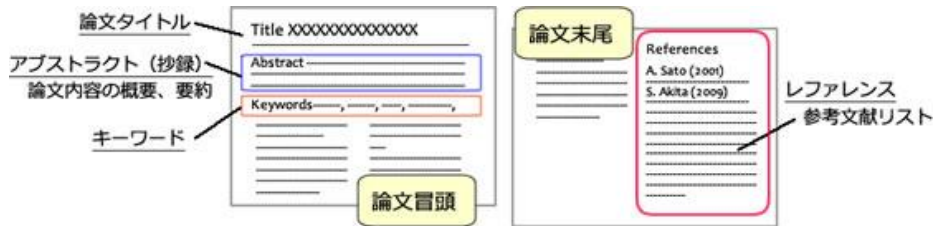


図 4-3. チェイニング

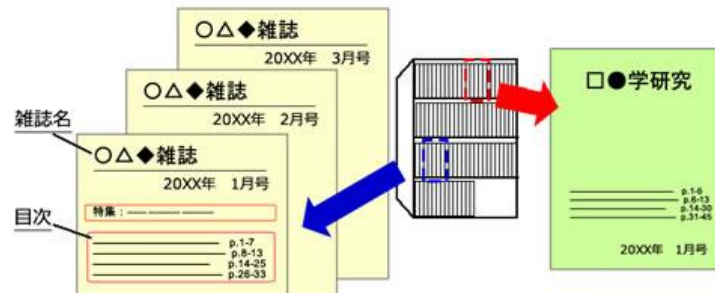


図 4-4. ブラウジング

1つ目は、「キーワード検索」である(図4-2)。最近では「CiNii Research」や「Google Scholar」といった検索サイトがあるため、そこで自分が関心を寄せているキーワードを検索する方法である。特定の学術領域や学術誌ではなく、幅広く論文を検索する際に役立つ。ただし、網羅的であるが故に、論文ではなく「発表要旨」や、一般に販売されている「雑誌」もあわせて検索されてしまうため、使えるものが見つかったとしても資料の種別を絞り込むように検索方法に工夫が必要となる。

2つ目は、「チェイニング」である(図4-3)。これは自分の研究にとって重要な文献を1つ挙げ、そこで引用されていたりする文献を「芋づる式」に拾っていくという方法である。この方法だと自分の関心のある研究をより確実に拾うことができるため、個人的にはおすすめである。

ただし、この方法は「重要な文献とは何か」ということや、「どこまで拾うのか」といった問題がつかまとうことになる。そのため、重要だと思う文献をいくつか候補として持っておき、本文中で比較的多く引用もしくは参照されている文献をまずは集めていくとよい。そうすれば、集めた文献をさらにチェイニング対象にして、さらなる「引用関係」を追っていくことで、ある程度まとまった先行研究群を把握することができるだろう。

3つ目は、「ブラウジング」である(図4-4)。ちなみに、筆者は「ブラウジング」のこと

を「ウインドウショッピング」と呼んだりする。すなわち、図書館や書店で書籍の背表紙を眺めながら探したり、学術誌の目次を実際に見ながら探したりするという方法が「ブラウジング」である。

この方法の良いところは、これまで注目されていなかった文献（チェイニングでヒットしないような文献）に出会えるということや、興味があったけどタイトルを忘れてしまったものに再会できることなどが挙げられる。

ちなみに、筆者はこの3つを定期的に全てやっており、どれか1つでうまく先行研究が見つかるとは思っていない。これらを使いこなすことで、効率的に先行研究を探していただきたい。

コラム④ 先行研究の役割と読み方

1 先行研究の役割

卒論はレポートと同様に自分の頭の中に入っていることだけでは書くことができません。すでにどんな研究が行われ何が明らかになっているのかを把握するためにも、先行研究をきちんと読むという作業が必要になります。卒論においてレポート以上に重視しなくてはならない先行研究の役割を5つ見ていきましょう。

【先行研究の役割】

- ①研究蓄積を知る
- ②先行研究からテーマを導く
- ③自分の考えを補強する
- ④研究方法を探る
- ⑤論文の書き方を学ぶ

図④-1. 先行研究の役割

(1) 研究蓄積を知る

レポートと卒論の大きな違いの1つに自分で課題を見つけるというものがあります。自分で課題を見つけるためには、すでにどんな研究が行われているのか知る必要があります。先行研究と同じことをしても、そこには学問的意義も社会的意義も見出せません。

また、指導教員から「これをテーマにしたらいんじゃない？」と勧められて取り組む人もいますが、その場合もなぜそれがテーマとして成り立つのか、問いとして取り組む意義があるのかを自分自身が理解しなくてはなりません。

自分の研究テーマについてすでにどのような研究蓄積があるか把握すること、これは卒論に取り組む第一歩です。

(2) 先行研究からテーマを導く

研究蓄積を知ることで、まだ明らかになっていないこと、課題として残っていることが見えてきます。コラム③では研究テーマを決めて問いを立てる際、先行研究を参照する方法を紹介しましたが、先行研究の役割の1つに研究テーマを見つけ問いを立てるというものが

あります。

(3) 自分の考えを補強する

レポートで考察する際も、先入観や偏見に基づいた考えではないことを示すために必要なデータや他の研究者の指摘を引用してきました。これは卒論にも共通することです。最終的に先行研究と全く同じことを繰り返し述べているだけとなってしまうのは避けませんが、考察の途中で先行研究を取り入れることでより説得力のある内容になります。だからこそ、どこでどんなことが言われているのか、先行研究を読んで勉強することが求められます。

(4) 研究方法を探る

先行研究を読むとき、ついつい結論ばかりに意識が向かいがちですが、そこまでの過程も重要です。例えば、調査対象は異なるけれども調査方法を参考にすることが可能です。実験方法、アンケート調査、インタビュー調査などのデータ収集の方法として、先行研究から学べるものは少なくありません。

(5) 論文の書き方を学ぶ

論文を書くという経験は卒論が初めてという人が多いと思います。そこで論文の構成や独特の言い回しの参考にするために、先行研究の論文を読んでみましょう。特に引用方法は分野によって異なるので、自分の分野の論文で使われている方法を知るうえで役立ちます。

2 先行研究の読み方

ひとことで「先行研究」と言ってもその役割は様々です。次に、その読み方を見ていきましょう。卒論内で先行研究の効果を十分引き出すためには、読み方もポイントがあります。

(1) 一本で完結するわけではない先行研究

先行研究の重要性がわかったら、早速何か 1 つ先行研究を読んでみましょう。書かれている内容を十分理解できたでしょうか？

おそらく聞きなれない専門用語や概念、理論なども出てきたと思います。そのためこの先行研究を理解するためには、これらについて説明してある概説書を読んだり、各分野の専門用語集・事典などを調べたりする必要があります。

また一本の論文の中にも、他の論文からの引用があったり、別の資料に言及があったりします。これらの論文や資料にも触れてみましょう。芋づる式に次々と読まなければならない先行研究が出てきます。

卒論と比べてレポートは字数が少なく問題設定も小さいため、そこまで先行研究の調査

や読解に時間をかけなくて済んだかもしれません。しかし、卒論ではこうした先行研究を学ぶことも必要な過程となります。

先行研究が少なすぎるテーマの場合、とっかかりがを見つけ辛いですが、反対に先行研究が多すぎるテーマの場合、先行研究の把握だけでも膨大な時間がかかります。余裕を持った研究計画を立て（コラム②）、テーマから適切なサイズの問いに絞る（コラム③）重要性はここでも現れてきます。



論文調査のイメージは芋づる！

図④-2. 先行研究を探すイメージ

(2) 批判的に読むとは？

先行研究を読むとき「なるほど、そういうことだったのか！」と納得するだけで終わっていませんか？

もちろん知らないことを学ぶ際素直に受け取る姿勢も必要ですが、何でもかんでも「そのまま受け取る」では単なる勉強です。皆さんには卒業研究をしたうえで論文を執筆することが求められています。

そのためにも実践してもらいたいのが「クリティカル・リーディング」（批判的な読み）です。先行研究で使われている研究手順は適切か、解釈はその一種類だけでいいのか、条件を変えてもこの結論は適用できるのか、などの様々な視点から再検討してみてください。

批判点を見つけることは簡単ではありませんが、この読み方ができることで問題設定を立てたり、自分の研究意義を説明したりするといった作業が行いやすくなります。

第5章 調査をする人へ（提出まで150日）

本章では、卒論で調査を実施しようと思っている人、あるいは調査って聞いたことがあるけど自分は調査するのかわからない人向けに、調査とは何か、その必要性とは、調査をどうやって進めていくのか、注意点は無いのか、など「入門の入門」に相当するアドバイスをお伝えできればと思っている。

もし調査について少しでも知識がある方は、コラム⑤に掲載している参考書を読んでもらった方が良いので、本章は読み飛ばしていただきたい。

5-1. 調査の概要と必要性

まず、断っておきたいのは、論文を執筆するうえで必ず調査を行うわけではないということだ。なぜなら、調査とはエビデンスとなるデータを得るために行う作業であり、データを必要としない論文ではそもそも調査する必要がない。

しかし、データがまったくない論文もほとんどなく、参考資料や歴史的資料などをエビデンスとして提示する際にも〈文献調査〉を実施することになる。また社会科学系の場合には大多数が質的・量的データを扱うため、〈質的調査〉や〈量的調査〉を行う必要がある。

一方で、自然科学系の場合には、調査ではなく実験を行うことが多い。それは研究室や実験室で行った実験結果をエビデンスとして提示するためだ。

このように、論文を執筆するにあたって、言い換えれば研究を1つ完成させるにあたって、必ず調査や実験はつきものである。

そこで重要になってくるのは、調査法である。調査法とは、ある調査のノウハウとってよいかも知れない。例えば、インタビュー調査の場合には「どのようなスタンスでインタビューを行うのか」「質問はどのように組み立てていくのか」「フィールドワークと並行して実施するのか」といった具合に、さまざまな観点からその方法が組み立てられていく。

このような調査法の違いには、単なる違いではなく、科学におけるものの見方の違いが関わっている場合があるため気をつけていただきたい。

例えば、「どのようなスタンスでインタビューを行うのか」という問いに対しても、「研究として話を聞く者」として行うのか、「会話に参加する者」として行うのかでは、そこで得られるデータの性質が異なってくる。

前者はインタビューで得られた語りを実体としてみており、後者はインタビューで得られた語りをその会話のなかで作られたものとしてみていることになるからだ。すなわち、研究者がどのような質問や応答を繰り返していかにも一定の影響が与えられるのである。

このように、調査とは論文のエビデンスとなるデータを示すために、大多数の場合で必要であり、調査法によってはそのデータの性格が変化するものでもある。

5-2. 調査を進めていく

以上のように、調査とは大多数の卒論執筆者が直面する作業であると思われるため、以下では調査設計を含め、調査を進めていくプロセスをいくつかのパートに分けて説明していきたい。

ただし、改めて断っておくが、本書は調査法を専門とするものではなく、あくまで卒論をサバイブしていく学生に向けた1つの指南書である。そのため、より詳しく、正確な説明を求める場合には、適切な参考書に目を通していただきたい。本章はその足がかりになれば幸いである。

(1) 調査設計

■ まずは調査の種類を把握しておく

調査には〈量的調査〉と〈質的調査〉(あるいは、もう1つに〈文献調査〉)が存在する。前者は主に数字を扱う調査法であり、後者はインタビュー等の文字を扱う調査法である。最近では映像を録画する調査もある。

そして、〈量的調査〉のなかにも質問紙調査(アンケート)や学力調査などが、〈質的調査〉のなかにもインタビュー調査や参与観察などがある。また歴史的史料を扱う場合には〈文献調査〉と呼ばれる。

もちろん、ほかにも各分野において発展してきた調査法があるため、どのような調査法が自身の分野ではよく使われるのかをあらかじめリサーチしておくとうい。

■ 次に問いを確認する

調査を行う前に、どのような調査が必要なのかを見極める必要がある。そのためにも、自身が立てた問いを確認していただきたい。

例えば、次のような問いの場合には、以下の選択肢のうちどの調査が必要であるか、考えてみてほしい。

問1 大学生がどのような出来事に幸福を感じるのか？

問2 大学生が幸福を感じるのとはどのようなメカニズムによって達成するのか？

選択肢：質問紙調査、インタビュー調査、参与観察、文献調査

いかがだろうか。少し難しいかもしれない。まず、問1については、言い換えれば「いつ大学生は幸福を感じるのか？」ということであり、幸福を感じるプロセスではなく、その瞬間がどのようなタイミングであるかを明らかにしたい。そうなれば、たくさんの大学生に質問し、その傾向を捉える必要がある。よって、答えは【質問紙調査】ということになる。

ただし、これを【インタビュー調査】で明らかにすることも可能だろう。一般性の問題を抱えてしまうためにおすすめはしないが、仮説的に答えを出すことはできるだろう。ここでいう一般性とは、より多くの人にあてはまる答えであるかどうかを表すものである。インタビューだと、より多くの人ではなく、特定の人に偏ってしまうため、そこで得られたデータは偏りがあることになるのだ。

では、次に問2である。これは問1と異なり、「メカニズム」であるため、プロセスが重要になってくる。そのため、例えば問1で明らかになった結果をもとに、大学生はある場面においていかに幸福を感じているのか、ということを考えるのであれば、【インタビュー調査】や【参与観察】によって幸福を感じるプロセスを調査する必要がある。

ただし、これも【質問紙調査】で部分的に明らかにすることは可能である。その際、かなり質問項目を練らなければならないため、難易度は上がるかもしれない。

このように、どの調査法でもデータを得ることはできるが、より適切さを追求しながら選択していただきたい。その際、先行研究を探し、モデルになる研究を見つけておくとうい。それは研究の内容というよりも、問いと方法のつながりがうまくできている研究、自分が興味関心のある問いや方法を用いている研究を見つけておくとういことだ。

(2) 人を対象とした研究倫理に関わる問題

調査を行うにあたってかなりセンシティブな課題が「倫理」である。これは研究倫理とも呼ばれ、例えば、個人情報の保護であったり、精神的な苦痛の回避であったり、調査・研究によって対象者に不利益が被ることがないように配慮しなければならないというものである。

ただし、卒業論文で研究倫理に気をつけなければならない場合、おそらく指導教員から助言があるはずなので、助言があった場合にはそれに従っていただきたい。また、自身でも調査・研究による対象者への不利益については慎重であっていただきたい。

例えば、過去の経験をインタビュー調査する場合、児童養護施設等での参与観察をする場合、質問紙調査でいじめや児童虐待といったセンシティブな質問を行う場合など、状況に応じてそれぞれ対象者が不利益を被らないように対応することが必要である。

やや長いですが、日本学術振興会と呼ばれる組織が出している『科学の健全な発展のために』という冊子から以下の文章を引用しておきたい。

科学研究の名の下に何をやってもよい、ということではありません。研究の自由は、守るべきものを守る義務と責任を果たしてこそ保障されるものであることを忘れてはい

けません。では、「守るべきもの」とは、どのようなものでしょうか。一言でいえば、科学は、人類の健康と福祉、社会の安全と安寧、そして地球環境の持続性に貢献することが望まれており、研究ではこれらの価値を守ることが期待されています。社会の安全を脅かすような研究を計画することは許されないのです。

(日本学術振興会 2015、p.21)

(3) 実際に調査する

調査法を決定し、研究倫理が守られていることが確認できれば、実際に調査を行なっていく段階になる。ここからは、データを集めていくことが肝心となってくる。なぜなら、調査期間を過ぎれば、なかなかデータを得ることができないからだ。

ちなみに、筆者は2021年7月～11月にかけてインタビュー調査を実施し、そのデータを使いながら現在でも論文を執筆している。しかし、なかなか思い通りにデータがあるわけではないため、これを執筆している現在(2023年3月)は追加調査を計画している。おそらく、4月～9月にかけて大規模調査を行う予定である。2021年調査で得られたデータは、そろそろ分析に耐えられなくなってきたのだ…。

そのため、データはできるだけ集めておいた方が良い。分析に耐えられるかどうかは、もちろん調査の質も関わるが、量もそれなりに重要な要素である。

(4) データのとりまとめ

調査がひと段落ついたら、データをしっかりと管理しておいてほしい。質問紙の場合には調査IDがあるかもしれないが、インタビュー調査や参与観察の場合には自身でIDを付けておく必要がある。また個人情報保護の観点から、匿名化等の処理が必要なものは早めに行なっておくとよい。その際、処理の仕方を必ず残しておくことで、あとから困ることが減る。筆者は付与のルールを失念したので、2023年からは新たなルールで運用し、それをメモしておくことを心に誓っている。

この辺りのアドバイスは調査法の参考書でかなり詳しく説明してくれるものもあるので、そちらも参考にしていきたい。

コラム⑤ 調査設計

どの分野の卒論であってもそれが論文の一種である以上、根拠をもとに自分の意見、考えを述べていくという点は共通しています。

それでは、根拠となるデータをそろえるにはどうすれば良いでしょうか。それは「調査」をして、必要なデータを集めるということになります。ただし、ここでいう「調査」は分野によって様々です。アンケート調査、インタビュー調査、実験、フィールドワークなど多岐にわたります。

本コラムでは、それぞれの調査について細かくは説明することができません。自分が卒論で取り組む問題に対して答えを出すにはどのような調査方法が適切なのか、指導教員や同じ研究室のメンバー同士で相談して具体的に進めていってもらうことになります。

本コラムでは、「質的調査」と「量的調査」の紹介と注意点、「資料調査」について伝えていきます。

1 「質的調査」と「量的調査」の紹介と注意点

(1) 質的調査

文字や音声、映像など、数値化しにくい資料を収集・解釈し、その意味や内実を問う調査
(石黒圭 2021)

インタビューやフィールドワークからデータを収集したり、文学や映像などの視覚的資料を分析したりする調査です。全体的な傾向を数値で表すというよりは、個別的な事象を深く考え、言葉によって説明します。

[インタビューの場合の注意点]

- ✓ インタビューの種類は適切か
- ✓ インタビューの質問は適切か
- ✓ 研究倫理上の問題に配慮しているか
- ✓ 調査への同意を書面で取っているか

(2) 量的調査

アンケートのように、数値化しやすいデータを収集・分析し、その現象の実態を客観的に把握する調査

(石黒圭 2021)

アンケート調査や実験などが含まれます。質的調査とは異なり、個別性よりも全体を把握し、統計学をベースに数字で考えます。自然科学や生命科学の分野で使われますが、大量のデータを扱う場合、人文学・社会学でも用います。

[アンケートの場合の注意点]

- ✓ サンプルング手法は適切か
- ✓ 研究倫理上の問題に配慮しているか
- ✓ パイロット調査とリハーサルはできているか
- ✓ 様々な統計の種類から適切な手法を選んで分析できているか

以上から分かるようにこれらの調査は「思い立ったらやろう」ではできません。必要なデータを適切な形で入手するためには、入念な事前準備が必要だからです。また実際に行った調査が失敗してしまうこともあります。

そのため、複数の方法でデータを収集することを考えたり、失敗点を改善し、もう一度調査を行える時間的余裕を持ったりすることが必要です。(言うまでもありませんが、それらの場合は、調査協力者に負担を強いるようなことになってはいけません。)

上記のような調査を考えている場合は、早めに計画を立て進めていくことが必要です。

2 資料調査について

「質的調査」「量的調査」以外にも様々な調査が行われています。例えば、文献を研究するために先行研究を調べる「資料調査」の場合は、必要な本や論文を探し出し入手することが調査です。大学の図書館や公共図書館も存分に活用しましょう。

(1) ILL サービス

名古屋大学図書館や岐阜大学図書館に探している資料がない場合は、他大学から文献の複写物もしくは図書の本物を取り寄せることができます。

詳細は各大学図書館の web サイト確認してください。

名古屋大学：https://www.nul.nagoya-u.ac.jp/guide/ILL_guide.html

岐阜大学：https://www.lib.gifu-u.ac.jp/guide/ill_1.html

(2) デジタル・アーカイブやデータベース

デジタル・アーカイブやデータベースを使うことで、効率よく調査を進められる場合があります。自宅にいても利用できるものから、大学図書館、公共図書館で利用できるものまで様々ですが、どのようなものが提供されているのかを知っておくと便利です。今回は3つ紹

介します。

1. JapanKnowledge Lib

日本大百科全書、日本国語大辞典、現代用語の基礎知識など、70以上の辞事典、叢書、雑誌を横断検索できます。

閲覧方法

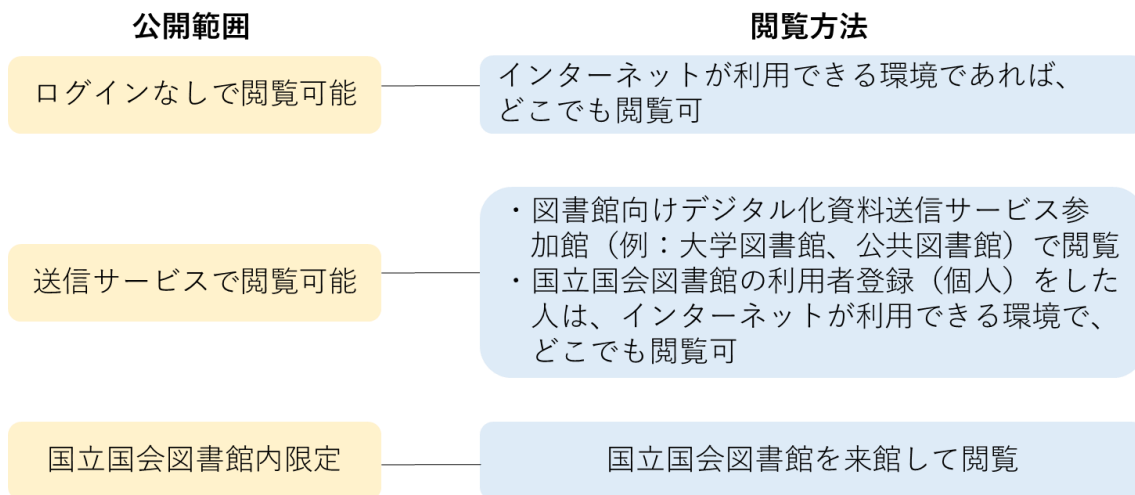
- ・名古屋大学附属図書館の web サイト（「データベース案内」ページ）
（※名古屋大学構成員は学外からの利用も可。名古屋大学附属図書館の web サイトの「学外からの電子リソース利用」のページ）
- ・公共図書館

例：岐阜県図書館 ※各図書館 web サイトら利用できるか事前に確認しましょう。

2. 国立国会図書館デジタルコレクション

国立国会図書館で収集・保存しているデジタル資料を検索・閲覧できます。

閲覧したい資料によって公開範囲が以下の3つに分けられています。



図⑤-1. 国立国会図書館デジタルコレクションの閲覧について

3. 新聞記事データベース

紙の新聞を一枚一枚めくりながら調査をすることは非常に大変です。しかし、データベースを使えば特定の期間やキーワードを設定して読みたい記事を探すことができます。

- ・ The Japan Times Archives
- ・ The Times Digital Archive
- ・ 朝日新聞クロスサーチ

- ・中日新聞・東京新聞記事データベースサービス
- ・日経テレコン 21
- ・毎索
- ・ヨミダス歴史館 など

新聞記事データベースの場合、大学図書館や公共図書館が契約し利用者に提供しています。そのため基本的には館内または学内で利用します。（一部、自宅から利用できるものもあります。）

今回紹介したもの以外にも図書館が提供しているデジタル・アーカイブやデータベースはあります。「調査」をするときぜひ活用してみましょう。

【より詳しく「調査」について知りたい人におすすめの参考書】

- 石黒圭、2021、『文系研究者になる——「研究する人生」を歩むためのガイドブック』
- 岸政彦・石岡丈昇・丸山里美、2016、『質的社会調査の方法：他者の合理性の理解社会学』
- McCracken, G., 1988, *The Long Interview*, Newbury Park, SAGE Publications. (寺崎新一郎訳、2022、『インタビュー調査法の基礎——ロングインタビューの理論と実践』千倉書房.)
- 箕浦康子編、1999、『フィールドワークの技法と実践——マイクロ・エスノグラフィー入門』ミネルヴァ書房

第 II 部 応援編

第6章 章立てを考える（提出まで100日）

さて、いよいよ【応援編】に突入しているが、ここからは特に執筆作業にまもなく取り掛かる方に向けた実践的なアドバイスを伝えることが目的である。そこで、まずは具体的に文章を書いていくのではなく、実際に書いていくうえでの必要な道筋を示してくれる地図のようなものを作ることが推奨される。本章は、その地図のようなものとしての「章立て」を書くことの必要性と具体的な書き方について考えていきたい。

6-1. 章立ては論文の地図になる

章立てとは、目次のようなものであり、これから書くつもり論文の大まかな流れを表したものである。例えば、この卒論に関する冊子も、まずは章立てから考え始めている。最初にどのような話を持ってくることで読者に本書の意図が伝わりやすいか、順番をどうすれば読者の役に立つか、どこかで区切りをつけたほうがよいか、などを考えながら章立てを作成している。

とくに第I部と第II部に分けることは、実際に1~10章を並べてから考案したものである。このように、実際に書き始める前には、たいてい章立てを作成することになる。

この段階では、「10章構成」「卒論講座の流れを踏襲」「コラムを挿入?」「調査・実験は入れたい」というアイデアをつなげてみたものであった。ここから、現在の目次のような章立てへと再構成し、執筆作業を進めている。

このように、初期段階でこの程度の章立てを作成し、それを再構成して話の流れをある程度作っておくことが、スムーズな執筆作業を可能とするのである。

では、繰り返しになるが、章立てを作っておくことのメリットとは何だろうか。ここでは2点挙げておきたい。

1点目は、論文の大まかな流れを把握しているため、情報の取捨選択や議論の組み立てが行いやすくなることである。基本的に論文は論理的であることが要求されるので、話の流れは一貫していなければならない。しかし話の流れに一貫性をもたせようとしても、様々な情報が手元にあると、それらをどのように組み合わせて議論を立てていくかに迷いが生じる。

そこで、その一貫性を事前に担保してくれるのが章立ての存在である。章立てがあることによって、話の流れをその都度確認できるので、その話に必要な情報かどうかを判断することが可能になる。そうして必要な情報を収集していくと、必要のない情報はすでに削ぎ落しているため、自分が予定していた議論を組み立てる際に迷いが生じにくくなる。こういった情報を整理したものは、しばしば「アウトライン」と呼ばれる。

この章立てやアウトラインのメリットは、“章”に限らず様々なレベルでも応用可能である。例えば、第8章で説明する「パラグラフ・ライティング」においても、その効果を発揮する。パラグラフとは「段落」のことであり、「パラグラフ・ライティング」というのは各段落を構成するルールのようなものである。そして、そのルールには段落を3つ（あるいは、4つ）のパートごとに分解し、それぞれを組み合わせることで段落を再構成することが求められている。

このとき、事前に3つのパートで書く内容を章立てのように決めておけば、パートごとに必要な情報を収集することができ、スムーズに1段落を書き上げることができる。ただし、各段落レベルであれば、書き慣れ始めると考えながら執筆できるようになるため、わざわざメモを作成しなくても書けるようになるだろう。

2点目は、論文に対する指導やアドバイスを受ける際に、具体的な内容についての助言をもらえる確率が高くなることである。これはアドバイスする側になるとわかるのだが、章立てがあることによって、執筆者が目指している話の流れを理解することができ、それに合わせた必要なアドバイスや修正案を提示できるようになる。章立てがないと、どこに話の着地点をもってくるのかがわからないため、雲をつかむようなアドバイスしかできないのだ。

そのようなアドバイスを貰うと、執筆者は「よくわからないがそうしてみよう」という暗中模索へと再び突入してしまう。それでは、かえってアドバイスがマイナスな影響を及ぼしかねない。それを回避するためにも、できれば章立てはあったほうがよい。

このように、章立てとは自分にとっても、またはアドバイスをする人にとっても重要な情報源となる。それは、自分が書こうとしている論文の全体図を表す地図のようなものであり、どのような道を辿っていくのかを示す指針になる。ただし、やみくもに章立てを書くことは、次節で詳しく述べるように、章立てとしての効果をあまり発揮しなくなる可能性がある。そこで、章立ての作成において注意してほしいことを次節では紹介する。

6-2. 分野のフォーマットに合わせておく

章立ての作成において、最も注意してほしいことは、必ず自身の専門分野のフォーマットに合わせておくということである。

まず、皆さんはいずれかのゼミに所属しながら卒論を執筆していることだろう。そのゼミがどのような専門分野であるかはすでに知っていると思われる。そこで、その専門分野ではどのような章立てをしているのか確認してほしい。これが、最も気を付けてほしいポイントである。

例えば、筆者は「教育社会学」を専門としているため、『教育社会学研究』というのが専門分野の国内トップジャーナルである。その雑誌に掲載されている論文をいくつか参照す

ると、多くの研究が「問題の所在→先行研究→調査やデータの概要→分析→考察→まとめ」という章立てになっている。もちろん細かな点において違いはあるが、だいたいこうなっているというのはそれに従って書くことが求められている証拠なのだ。このような専門分野のフォーマットのようなものをまずは確認していただきたい。

その最たる理由として、話の組み立て方がその分野特有のものになりやすくなるからという点が挙げられる。本章の初めに確認したとおり、章立てとは話の流れを決めておくものであった。この話の流れとは、論文として、読者へ説得的に研究成果を提示するための論理的な展開を意味する。

ただし、何が論理的であり、何が説得的であるか、という曖昧なものに決まりは特になく、専門分野ごとの慣習のようなものがあるだけだ。そのため、専門分野ごとに論理的・説得的であることを示すために、まずはその論理的な展開の仕方、すなわち話の流れを理解し実践するところから始めることが求められる。

ここで皆さんは、「なぜ専門分野ごとの慣習を理解しなきゃいけないのか」「別に卒論だしいいじゃん」という考えを持つかもしれない。それはその通りだろう。筆者である私自身も、卒論執筆の当時を振り返れば、そのようなことをあまり気にしていなかったし、おそらく同様の考えをもっていただろう。

他方で、研究論文では自分の伝えたい内容を誤読されることなく伝えるために、各分野で考え出された型がある。型に則って書くことで、誤読されないよう伝えようとする姿勢を示すだけでなく、その分野について勉強したことを示すことにもつながる。その 2 つの側面から卒論の合格を目指すことは、決して無駄な努力ではない。

もう 1 つ、別の角度からも専門分野のフォーマットを確認する理由を記しておきたい。それは、前節の 2 点目にも挙げたように、論文に対する指導やアドバイスを受ける際の補助になりうるからということだ。

専門分野に特化した院生の先輩や指導教員は、その分野における論文の書き方を熟知しているので、分野のフォーマットに則った論文であれば丁寧なアドバイスが期待できる。一方で専門分野のフォーマットから乖離している章立ての場合、不慣れな中からアドバイスを受けることになり、自身が抱える問題に話が発展しづらいという事態が想定される。

そこで、事前に専門分野のフォーマットをおさえておくことによって、論文執筆に関する深いアドバイスを得ることができ、自身が実際に直面している問題の解決にもより近づくことができるだろう。

6-3. 執筆しながら修正していく

最後にお伝えしておきたいのは、研究計画と同様に、章立ても執筆を進めながら修正が必

要だということである。あらかじめ決めておいた章立てが完璧であることはなく、常にその再考を意識しながら、一貫性のある論文に仕上げていただきたい。

ちなみに、余談ではあるが、章立てを作成すると、結構書いたような気分になれるため、モチベーション維持に役立つという経験談を記して本章を締めくくりたい。

やはり、長い文章を書くことは、先の長い道のをイメージしてしまうため、基本的にはモチベーションを維持させるのが難しい(現に、筆者は本冊子が長く遠い道のりのように感じながら執筆を進めている)。

そのとき、章立てを作っておくことで、どのくらいの道のりがあるのかを事前に把握することができる。それは同時に、なんとなく書いている気分になるため、モチベーション維持につながる。

そして、章立てを再考するときも同様に、なんとなく進めている気分になるため、モチベーションが維持される。執筆に行き詰ったとき、アイデアが浮かばないとき、そうした先に進めない状況に陥った場合、実は章立てを見直すことは重要なのである。

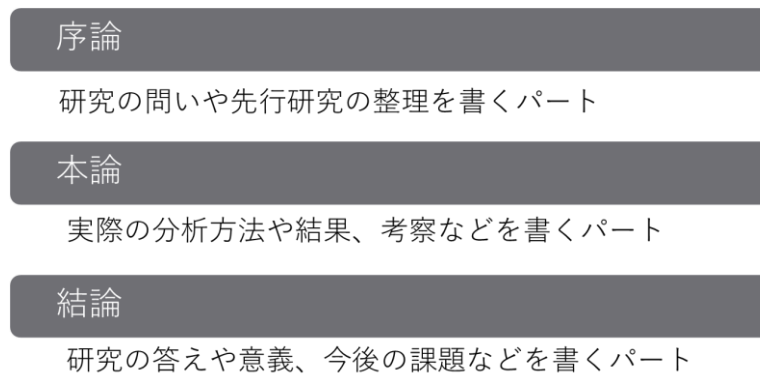
なぜなら、行き詰まる原因は章立てにあるかもしれないからだ。章立てを見直すことで、道のりを再修正し、折れかかったモチベーションも維持することができるだろう。騙されたと思って、困ったときにぜひ試してみてほしい。

コラム⑥ 論文構成

卒論を書くとき、「そんなにたくさんの字数を書ききれぬだろうか」と不安になる人も多いのではないのでしょうか？

確かに字数は今まで書いてきたレポートよりも多いですが、実は論文の構成は同じなのです。では構成が同じで、字数が増える場合、何を書き足せばいいのでしょうか。このコラムでは、レポートとの共通点・相違点に目を配りながら論文構成を紹介します。

まずは、基本構成です。



図⑥-1. 3つの基本構成

レポートの時にも意識してきた「序論」「本論」「結論」という流れは論文の基本であり、卒論でも使えます。それぞれの箇所で具体的に何を書くかは、すでに想像がつかますよね。「序論」がこれから取り組む研究の「問い」や目的、背景、さらにはそのための先行研究整理です。「本論」では実際に用いた実験や調査の方法・結果、自分の考察を書きます。「結論」には「序論」で立てた「問い」に対する答え、そして今後の課題に言及します。

次に、もう少し詳しく構成の中身を見ていきましょう。例として社会科学分野の章立てを図⑥-2に挙げています。

まずは序章で①問題設定、②研究目的、③卒論の構成を書きます。③卒論の構成とは「第1章では～、第2章では～について述べる」といった各章の簡単な紹介です。続いて第1章では先行研究の整理、研究課題の導出を書いています。序章で「問題設定」をし、第1章でも「研究課題」に触れていますね。両者は何が違うのでしょうか？

序章の「問題設定」ではこれから何について論じるのか、つまり「問い」は何かを簡潔に書きます。第1章の「研究課題」では先行研究を整理しそこから「問い」を導き出します。つまり、第1章では序章よりも詳しい「問い」の説明をしているというわけです。これら序

章・第1章の内容は、論文の基本要素のうち「序論」にあたります。

続いて第2章以降が「本論」になります。ここでは分析対象や分析方法、分析結果、結果を踏まえた考察などを書きます。実験を行う分野であれば実験方法や実験条件、アンケート調査やインタビュー調査を行うのであればその方法や対象者など研究の前提条件をきちんと示す必要があります。そしてそれらの分析から得られた結果や考察もまとめます。これを論証とも言います。

先ほど言ったように、卒論はレポートと構成は同じですが、字数は異なります。何を増やすかという、この本論の章数です。では章数はどのように増やせば良いのでしょうか。

結論からいえば、「本論」で展開すべき内容を細分化していくとよい。そもそも、「序論」で立てた「問い」は、卒論全体の大きな「問い」です。しかし、いきなりこの大きな「問い」に挑もうとすると、どこから手をつければいいのか分からなくなってしまいます。そこで大きな「問い」を小さな「問い」に分け、各章で小さな「問い」とその「答え」を出します。これら小さな「問い」を積み上げて最終的に大きな「問い」の「答え」に辿り着けるようにします。「問い」を分けることで、章の数が増えていきます。

小さな「問い」を最後には大きな「問い」へとまとめるのですが、その方法として、「連鎖式」「並列式」の2種類を紹介します。

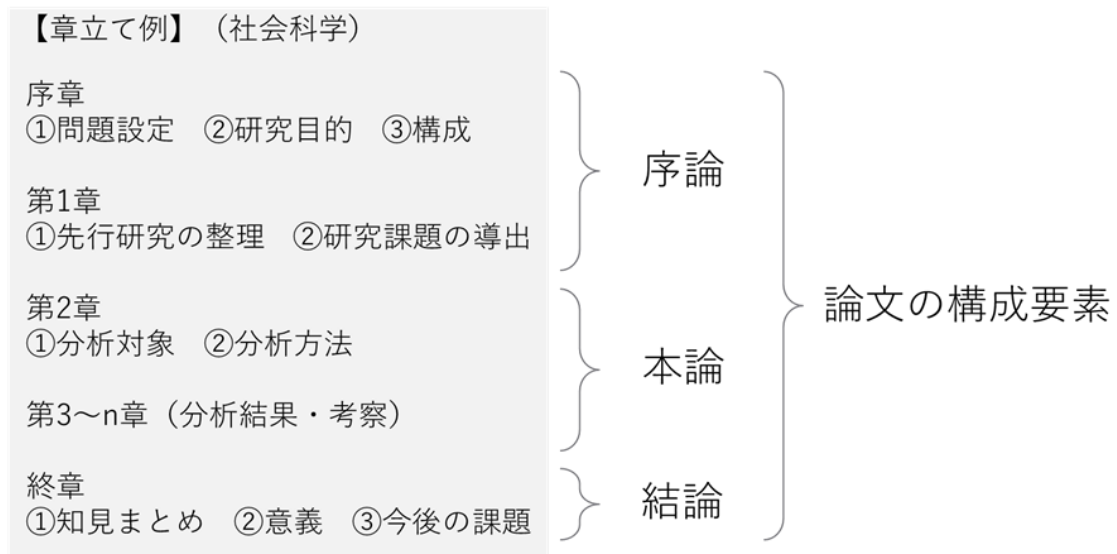
「連鎖式」は前章の「答え」が、次章の「問い」を導く前提になっているパターンです。例えば、第1章で生産量が減少している原因、つまり「なぜ生産量が減少しているのか」という「問い」に対する「答え」を出し、第2章では過去にもその原因は存在していたのに生産量は減少していなかった、にもかかわらず、なぜ今回は減少の原因となったのか、という新たな「問い」を導いていきます。

「並列式」は各章で「答え」を出し、最後にまとめるパターンです。例えば第1章で経済の観点から考察し「答え」を出す。第2章では地理の観点から考察し「答え」を出す。第3章では歴史の観点から考察し「答え」を出す。そして最後に第1章～第3章までの「答え」を統合して大きな「問い」に対する「答え」を出すというものです。

このように卒論では、各章で小さな「問い」に対する「答え」を出し（＝論証する）、最後に大きな「問い」に対する「答え」が導き出せるようにするイメージをもってください。

それでは最後に終章です。終章は論文の基本構成のうち「結論」に当たる部分で、本論で述べてきたことを総括し「問い」に対する「答え」を出します。さらにその「答え」が今日の研究状況にもたらす意義を説明できると良いです。卒論は提出期限があるので、今回できなかったこと、新たに登場した問題などもあると思います。これらは今後の課題として終章に書いておきます。

以上、社会科学分野の章立てを一例として見てきました。論文の基本構成「序論」「本論」「結論」が元となっていることに変わりはありませんが、各章の中身は分野によって順番や内容が異なることがあります。まずは自分の研究室の先輩たちの卒論を見せてもらうのが章立て作成の近道になるかもしれません。



図⑥-2. 論文の構成要素について

第7章 とりあえず書き始めなさい（提出まで70日）

本章は、卒論完成に向けて何か知識や技能、アドバイスなどを伝えるのではなく、「まずは書き始める」ことがいかに大切であるかを伝えることが目的である。章題にもあるとおり、本章は卒論提出の70日前を想定しながら、その時点で必要なことを書き記している。それはまさに「書き始める」ということである。これまでは問いの立て方や先行研究の読み方、論文構成の仕方など、知識レベルの話をしてきた。しかし、残り70日になると、そうした知識レベルはもはや問題ではなく（ある程度習得していることが前提になるが）、卒論完成に向けて実際に「書き始める」ことが大切になってくる。それがなぜ大切なのか、そして実際に書き始めて気をつけることは何か、以上の2点を本章では述べたい。それゆえ、これまでの章とは異なり、若干分量としても少ないかもしれない。ただし、だからこそ、残り時間が迫りつつある大学4年生の方々にはトイレ休憩や電車の移動時間などでさらっと一読いただきたい章でもある。

7-1. 考えるよりも書く

この時期で意識してほしいのは「考えるよりも書く」ということである。そうすることで、論文全体の論理を点検し、質の高い推敲を実践できるようになるのである。

まず、頭の中で考え続けるだけでは、論文の問いに答えうるだけの論理を理路整然と記すことは難しい。文字化し文章化していくなかで、後から論理構成を並べ替えていくのである。イメージとして、パズルを上手く並べるためには、まずパズルのパーツが揃っている必要がある。そのパーツこそ、文章化されたものなのである。

ただし、単に文章化しただけでは、すぐにパーツになるわけではない。論理構成を並べ替えていく中で、若干形を変える必要も出てくるだろう。そうした場面では、文章を適切に修正しなければならない。いずれにせよ、文章化されたものがなければ、論理を把握し点検することも、それぞれの文章を適切なものへと変えることもできないのである。

特に初心者の人は、必ずパーツを書いてしまうところから始めることを、ぜひ私はお勧めする。パーツを書いてしまったあとの、そのパーツをどうつなげればいいのかという編集作業が実は全体の論理の流れを作り上げることで、それは鳥の目の作業なのです。

（伊丹 2001、p.76）

伊丹（2001）は、「虫の目」と「鳥の目」を使い分けることが重要だと述べている。前者

については、「文章は、一字一字、一文一文の積み重ね」だからこそ細かい「虫の目」を使って書くことができる（伊丹 2001、p.73）。後者については、上記で確認したとおり、「全体の構成」を可能にするものである（同上）。この伊丹（2001）の主張を踏まえると、前述したパズルのパーツを揃える必要性が伝わるだろうか。

もちろん、「考えるより書く」ことを大事にするからといって、全く考えないというわけではない。ここでいう「考える」をシチュエーションで表現するならば、「書いてもないのに、パソコンの前で考えあぐねている」ということを意味する。それは、論理的な構成を考えることとは違う。それを考えることは、伊丹もいうように、パーツが揃って「鳥の目」で行う作業なのであって、パソコンの前で考えあぐねているのは「虫の目」で行う作業で起きることなのである。

ここで次のような批判を受けるかもしれないので、それについて応答しておきたい。すなわち、「考えあぐねているのは、アイデアが出てこなかったり、次の文章が浮かばなかったりするからであり、そこでは何も書けない」のだと。なるほど、「書き始める」ことさえままならない状況なのだから、考えあぐねているのだというのは納得できる。

そのときは、いっそ別の段落や別の節から書き始めれば良いと筆者は考える。決して、考えあぐねている箇所から始めなければならない訳ではない。むしろ、別の箇所を書く中で新たなアイデアが浮かぶことも多い。このとき、前章でみたような章立てが事前にできていると、どこから書けそうなのかを検討することも可能だろう。

以上より、まずは「書き始める」ことが重要である。ただし、それは決して順番通りに書く必要はなく、書けるところから書けば良い。

7-2. 推敲と分量

では、「書き始める」ことを進めていく中で気をつけることは何だろうか。

まずはその1つとして「推敲」を挙げておきたい。先述のとおり、「書き始める」ことは「虫の目」の作業であり、いずれは「鳥の目」で論文全体の論理構成を修正していくことが求められる。しかし、初心者にとって、もう1つ重要なのは「虫の目」と「鳥の目」のあいだ、すなわち書き終えて目前に置いた段落ごとに文章が成り立っているかどうかを確認するような「馬の目」（筆者が命名したものだが、ネーミングセンスはどうだろう…？）の存在である。それは一文一文を積み重ね、1つのパーツとして目の前に完成したものを、再度確認し成立しているかを点検するための視点である（次頁の図を参照）。

初めて論文を書く学生にとって、論文全体を見渡す「鳥の目」での作業はなかなか容易ではない。何本かの論文を執筆してきた筆者にとっても、依然として困難を感じさせる作業である。このとき重要なのは、パーツがある程度の質を担保しているかということである。な

ぜなら、「鳥の目」で作業する際に、そもそもパーツが脆く崩れやすいと、そこを再び埋める作業に時間を取られてしまうからだ。せめて、段落内で論理が一貫しているかどうか、文章に矛盾はないか、接続詞等に不備はないか、などを意識しながら、細かく段落ごとに「推敲」をしてほしいのである。

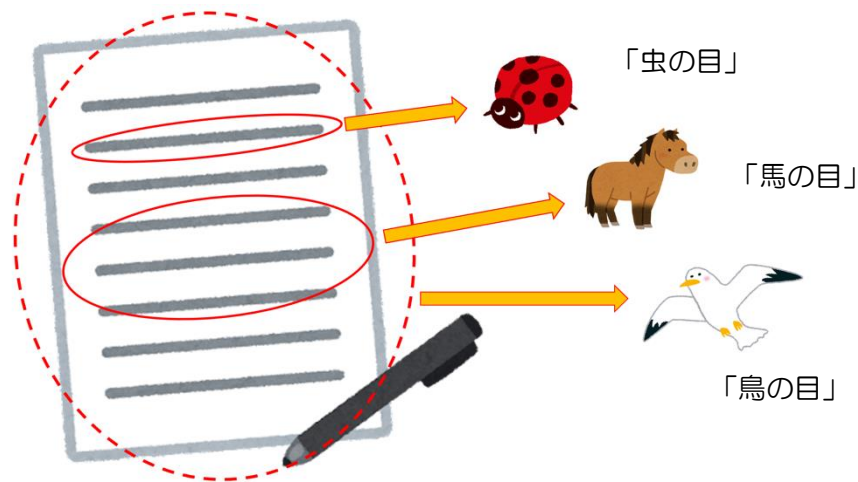


図 7-1. 論文を点検する 3 つの目

もう 1 つ、「書き始める」ことを進めていく中で気をつけることは、分量をあまり気にしないということである。「あと何ページくらいでいいかなあ」といった下限を意識してしまうことは、それが実質的な上限となってしまうかもしれない。簡単にいえば、30 ページを意識しすぎて、30 ページ程度しか書けなくなってしまうということである。

しかし、論文とはページ数で内容が決まるのではなく、論文の問いと答えに耐えるような論証があって始めて成り立つことになる。すなわち、必要な情報が適切に並んでいるから良いのである。そのため、事前に分量を決めてしまい、狭めたり広げたりすることは推奨されない。「書き始める」段階から分量は気にしないで良いのである。

ただし、提出間際（14 日前くらい）は例外なので注意していただきたい。卒論は、とにかく提出しなければ審査・単位認定されない。提出に間に合わせるためにも、ある程度見切りをつけて「30 ページ程度なら大丈夫だろう」という指標にしてもらいたい。

7-3. 最後にひとこと

残り 70 日しか残されていない読者の方は、まず「書き始める」ところから進めていただきたい。すでに「書き始める」段階を経た方は、先述した 2 点を意識してみしてほしい。いず

れにせよ、残り時間は減っていき、提出期限が迫ってきているのである。

次章以降は、実際に書くとなったときのライティング法に関わる内容に入っていく。ここではライティング法に関する知識を吸収するだけでなく、とにかく読みながら実践してみたい。

第8章 書き方を学んでみる（提出まで50日）

本章では「論文を書く」という作業を進めていくうえで最も重要であるといっても過言ではない「書き方」について話を進めていく。ただし、先に断っておきたいのは、「書き方」に関する参考書や専門書は山ほどあるため、そちらを読んでいただく方が絶対に力がつくということだ。

そこで、あえて本章が意識しているのは、どのくらい「書き方」を追求すべきなのか、という点である。それは、「書き方」に関する参考書や専門書が山ほどあるからこそ、どこまで読めばよいのか、どのくらい「書き方」に向き合えばいいのかについて考える視点である。

筆者の経験を先に述べておくと、参考書や専門書を10冊読んでも、「書き方」の能力や技術が無限大に高まるわけではなかった。それゆえ、10冊も読む時間があれば、3ページでも実際に書いた方が良かったと実感している。

8-1. 初めての長い文章

卒論は、おそらく人生において初めてと言ってよい程の長い文章を書く機会になる。例えば、字数の下限が3万字であれば、A4にして約25~30枚の原稿を書くことになるだろう。逆に、字数制限が特に設けられていない学位論文だからこそ、目安もわからず40枚以上書いてしまったという人もいるかもしれない。しかし、稀な経歴を持たない限りは、それほど長い文章を書く機会はこれまでなかったはずだ。せいぜい、読書感想文や作文コンテストでA4にして3~5枚程度だろう。

それゆえ、「さあ、書いてごらん」といっても書けるはずがない。もちろん、でたらめな内容を並べてテキストに書くことはできるかもしれないが、それにしても多すぎるに違いない。論文としての体裁を成しており、論理的に構成したうえで問題と答えを含むとなれば、もっと難易度があがるだろう。

そんな状況に置かれた大学生にとって、「書き方」についての予備知識をある程度持っているに越したことはない。一方で、最近ではそうした予備知識を伝達する教育の一環として、大学1年生向けに「基礎演習」「基礎ゼミ」といった初年次教育が盛んになっている。ただ、一定数の1年生にとっては、そのような講座で習う「書き方」がどれほど重要かわからないだろう。卒論を書くまでは。

そこで本章は大学4年生向けに、改めて「書き方」についての予備知識を持っておくことの大切さを話しておきたい。その際に、冒頭でも述べた通り、どのくらい「書き方」を追求すべきなのか、言い方を変えれば、「書き方」についての予備知識を蓄える作業はどの程度

すべきなのかを考えたい。

おそらく「どの程度すべきなのか」という限界を示すような問いは、論文執筆というある種の創造的行為においては忌避されるかもしれない。しかし、卒論は提出期限があり、自身の能力にも限界がある。無限にやっていると埒が明かない。それゆえ、ある程度の線引きを意識することもまた、卒論という長い旅路をサバイブする上で重要であると筆者は考えている。

8-2. 論理的な文章を書く

では、実際にどのような「書き方」に関する予備知識を持てばよいのか。ここでは、「論理的な文章」を書けるようになるための知識を真っ先に挙げておきたい。ただし、「論理的な文章」といっても若干曖昧な表現であることは否めないため、それがどのようなものかという簡単な説明から始めたい。

まず、「論理的」というのはそれほど難しく考えず、「論理が一貫している」というイメージで構わない。論理が一貫しているということは、その時々には生じる自身の感情や感覚で物事を考えるのではなく、一定のリズムで論理を1つずつ展開させていくのである。したがって、「論理的な文章」というのは「論理が一貫している文章」とも言い換えられる。

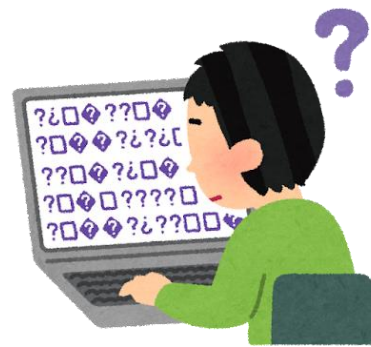
例えば、次のAとBの文章を読んでみてほしい。どちらが「論理的な文章」といえるだろうか。

A

人間にとって睡眠は7時間程度が良いとされている。実際に、筆者は7時間の睡眠時間を確保できたときに非常に健康に良いと感じる。また、その感じ方には個人差があるかもしれない。「ショートスリーパー」と呼ばれる人々は5時間程度で良いからだ。

B

人間の健康にとって、睡眠時間は7時間程度が良いとされている。ただし、なかには「ショートスリーパー」と呼ばれる、短時間の睡眠で十分に健康を感じる人々もいる。それゆえ、睡眠時間が与える健康的だと感じる認識には個人差があるのかもしれない。





AもBも、健康には7時間睡眠が良いとする「従来の議論」に対して、健康に対する人びとの感じ方には個人差があるのではないかという「新たな仮説」を批判的に提示している点では共通している。

しかし、その論理が一貫しているかどうかを点検してみると、Aの方向が明らかに間違いとして指摘されるべき箇所がある。それは、2文目と3文目の間を「また」という接続詞で繋いでいる点である。

そもそも、「また」というのは「並列・付加」という意味しかもっておらず、この場合、2文目の内容と3文目の内容は「並列」あるいは「付加」の関係にあることになる。だが、本当は、「従来の議論」をしてきた2文目に対して、3文目以降で批判的な「新たな仮説」を提示しようとしている。つまり、ここで使用すべきは「逆接」である「しかし」「だが」である。

さらに、若干細かな点を突っ込むならば、「ショートスリーパー」に関する説明もやや雑だろう。「5時間程度で良いから」というのはどのような根拠のもとに断定できるのか、ということだ。せめて、「5時間程度で良いとしばしば自ら話している」といったように、含みを持たせる表現に変えた方がよい。

一方で、Bをみると、1文目で「従来の議論」、2文目で「従来の議論で説明できない例外」、3文目でそれらを総体的に捉える「新たな仮説」を提示している。接続詞もそれぞれ、1文目と2文目は「例外」を示す「ただし」を、2文目と3文目は前の結果を受けて次の話を展開させる「それゆえ」を用いている。こうして、内容的にも文法的にも論理が一貫している（ように書かれている）。

ところで、卒論で難しいのは、Bのような段落内での論理的な一貫性のみならず、段落と段落の一貫性、節と節の一貫性、章と章の一貫性というように、論文全体のさまざまなレベルで一貫性が保たれていなければならないという点である。もちろん、初めから全てできるようになるとは思われていないので、まずは段落内の一貫性から意識してみてほしい。

このような「論理的な文章」を意識することは、論文を書く上で非常に重要なことである。なぜなら、論理が伝わらなければ、論文として全く評価されないからだ。そのため、「書き方」の予備知識として、この「論理的な文章」に関するものはしっかりとおさえておいてほしい。

8-3. 「わかりやすければ全てよし」

「書き方」の予備知識として、「論理的な文章」に関するもの以外に意識することをもう1つ挙げておきたい。それは何かというと、「わかりやすい文章」に関するものである。再

び、曖昧な表現が登場したので、簡単に説明を加えておこう。

「わかりやすい文章」というのを言い換えると次のような言葉になると筆者は考えている。すなわち、「読者最優先の文章」「The sentence for readers」である。

ただし、その前提には「わかりやすい」という感覚は、書き手と読み手で若干異なるという理解がある。書き手にとって「わかりやすい」とは「書きやすい」ということになる。その感覚を踏まえて書くと、自分の知っている語彙や文法で書き、自分の思っていることを文章化していく作業になるだろう。

一方で、読み手にとって「わかりやすい」とは「読みやすい」ということになる。それは、筆者の知っている語彙や文法ではなく、読者の知っている語彙や文法に寄り添う必要がある。さらに、筆者の思っていることの論理や思考をそのまま伝えるための記号（接続詞）も用いなければならない。

このように、読み手にとって「読みやすい」文章を書くためには、読み手の立場から文章作法を考えなければならない。ただ、それを意識するだけでも「わかりやすい文章」に近づいていくことは間違いない。

そこで必要となる予備知識とは、さまざまな語彙や文法、あるいは論理や思考を伝える記号ということになる。

ちなみに、さまざまな語彙や文法、あるいは記号は、実際の論文を読み手として読んでみるのが一番勉強になる。自分が読んでいて、筆者はどのような工夫をしているのか、どのような言葉選びをしているのかということを考えてみると、案外使えそうなアイデアが転がっていることが多い。

「わかりやすければ全て良し」なのが論文である。「論理的な文章」であるべきというのも、この一言に集約されるのはいうまでもない。



8-4. 参考図書を駆使しよう

以下に示しているのは、本章でみてきたような「わかりやすい文章」あるいは「論理的な文章」を解説している参考図書である。冒頭に筆者の経験談を述べた通り、それほど多くの参考図書を読む必要はないため、もし探すのに苦労している方がいれば、この4冊をまずは読んでみていただきたい。

ちなみに、①～④は単なるリスト番号ではなく、筆者にとっての参考図書としての難易度も示している。つまり、①は簡単に読むことができるが、④に向かうにつれて徐々に難しくなっていく。ただし、難しいということはそれなりに内容が厚いということであり、読む価

値は非常にあると思われるため、ここに載せている。本学の中央図書館でも所属しているので、ぜひ活用してもらいたい。

- ① 佐渡島紗織・吉野亜矢子、2021、『これから研究を書くひとのためのガイドブック 第2版』ひつじ書房。
- ② 飯間浩明、2008、『非論理的な人のための 論理的な文章の書き方入門』ディスカヴァー・トゥエンティワン。
- ③ 佐々木健一、2014、『論文ゼミナール』東京大学出版会。
- ④ 伊丹敬之、2001、『創造的論文の書き方』有斐閣。

コラム⑦ パラグラフ・ライティング

1 学術的に書くとは？

本コラムでは実際に執筆する際に注意したいポイントをアカデミック・ライティングとして紹介します。卒論も論文の一種ですので、専門用語が大量に使われ、なんだか取っ付きにくい、難しく論じているものというイメージを持つ人もいるかもしれません。しかし重要なことは誤読されない文章を書くことです。誤読されてしまうと自分の言いたいことが伝わりませんので、読者にとってわかりやすい文章を書くという姿勢が必要です。

そのための方法として「厳密・正確に書く」ことを心がけてください。複数の解釈が可能な文章は、誤読が生じる原因となります。ここでは単語のレベル、文のレベル、パラグラフのレベルの3つに分けて説明します

まず単語レベルでは、抽象的な言葉を具体的な言葉に置き換えます。例えば「ほとんど」「だいたい」「おおよそ」という表現は、人によって指す範囲が変わります。また「彼／彼女」「氏」など人称代名詞も、誰を指すのか間違える可能性があります。数字で示す、名前は固有名を繰り返すなど具体的に書きましょう。

次に文のレベルでは、やたらと長い文は避けるようにしましょう。文が長くなればなるほどその構造は複雑になり、結局何が言いたいのかよく分からないということになりがちです。そのため一文一義やパラグラフ・ライティングを意識すると良いです。

例えば、次の文をより分かりやすくするために、皆さんだったらどのように修正しますか？

【問題】

複数の主張を説明しなければならない場合、書き手自身はそれぞれの主張を理解しているため一度に説明したくなるが、1つの文に何個も何個も情報を付け加えると初見の読み手は理解しづらくなり、また情報が多いことは誤解も招きやすいため、一文の中に書く自分の主張は1つまでにする。

上記の例文は専門的な内容について説明しているわけではないので、何が言いたいのか皆さんは理解できると思います。しかし、構造的にも分かりやすい文とは言えませんし、ましてや専門的な内容を論じる卒論になるとその分かりにくさに拍車がかかります。そこで一文一義（＝1つの文の中に主張は1つ）ということ意識してみましよう。

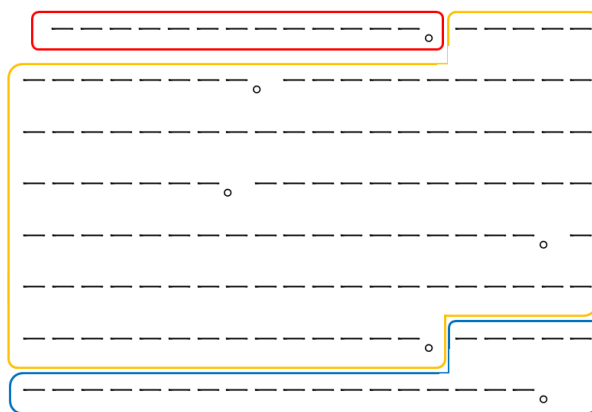
【解答例】

複数の主張を説明しなければならない場合、書き手自身はそれぞれの主張を理解しているため一度に説明したくなる。しかし、1つの文に何個も何個も情報を付け加えると初見の読み手は理解しづらい。情報が多くなればなるほど誤解を招きやすいため、一文の中に書く自分の主張は1つまでにする。

【問題】では一文で説明していた内容を3つの文に分けてみました。文を分けたほうがより分かりやすいですね。卒論を書いている文が長くなりがちなのは、文を分け必要に応じて接続詞を入れるようにしましょう。接続詞を使う場合は、同じ接続詞ばかり何度も使うのではなく、多種多様な接続詞を使いこなしてください。

最後にパラグラフのレベルを見ていきましょう。パラグラフは3つの構成要素から成り立っています。1つ目は「トピック・センテンス」で段落のトピック(=主題)を述べます。2つ目は「サポーティング・センテンス」で主題を支える論理的根拠を書きます。3つ目は「コンクルーディング・センテンス」でその段落の要約や補足をします。卒論を執筆する際、このようなパラグラフの構成を意識して書けると、これらの段落が集まった卒論全体も分かりやすいものになります。

(とあるパラグラフ)



【パラグラフの構成】

- ① トピック・センテンス
段落の主題
- ② サポーティング・センテンス
主題を支える論理的根拠
- ③ コンクルーディング・センテンス
段落の要約・補足

図⑦-1. パラグラフ・ライティングの構成要素

2 図・グラフを入れる時の注意点

分野や領域によっては図やグラフを卒論に入れる場合もあります。図やグラフはどうしても必要なもののみを本文内に入れます。載せたいけれど紙面に収まらない、入れると煩雑になるという場合は付録として卒論の最後に収録する方法もあります。しかし「実験や解析でせっかく得られたものだから」という理由だけでは付録にも載せません。先ほど誤読が生じないように執筆することが必要と述べましたが、そのためには必要なものを提示し

余計な情報は付け加えないということも重要です。

必要な図・グラフなのか判断したら、次にそこに書かれているデータも必要なものだけになっているか確認します。例えば、アメリカと中国の GDP の変遷について論じる場合、必要なグラフはアメリカと中国の GDP の折れ線グラフだけです。日本や他の国のデータも含む折れ線グラフではいけません。言うまでもないことですが、自分の主張の妨げになるからと故意に必要なデータを消したり操作したりすることはご法度です。

分かりやすい図やグラフの作り方については参考図書も出ていますので、それらを参照してみてください。

第9章 そろそろ出す準備を…（提出まで10日）

第9章と補章は卒論論文の内容に関わるものではないが、提出前後に必要な作業やその際のアドバイスを伝えることが目的である。そのため、これまでとは異なり、チェック項目形式で書かれているため、必要に応じて活用していただきたい。

まず第9章では、【提出前】にフォーカスを当て、10日前には必ずやっておいてほしいことを書くよう努めた。校正という文章の修正作業についてはコラム⑧を参照してもらいたい。

次に補章では、【提出後】にも卒業論文に関わる作業が残っていること、その準備を進めていくことについて書いている。そのため、もし読者の方がすでに卒業論文を提出したのであれば、本章は読み飛ばしていただきたい。

9-1. 【提出前】のチェック項目（内容編）

□ 研究の問いと答えがミスマッチしていないか？

これはよくあることだが、卒論という長い文章を書き進めているなかで、次第に最初に立てた問いとはあまり関係のない答えを最後に書いてしまうのだ。これでは、研究として認められないため、必ずこの段階で確認していただきたい。

□ 孫引きをしていないか？

卒論ともなると様々な文献を引用すると思うが、その引用が実際には「孫引き」というルール違反を犯していることがある。例えば、A という本に書かれていた B の本の内容を、「A で○○と述べられていた」と引用することが「孫引き」にあたる。これは原典の内容を正確に引用できているのかが不明瞭なため、避けるべきこととされている。この場合、原典となる B に目を通して引用することが誠実だろう。

しかし、例えば現在では入手できない文献や史料が引用されている場合には、そもそもその原典にたどり着くことができない。その際には、引用は A を記載するが、注釈で必ず原典 B の書誌情報も記載しておく。

□ パラグラフ・ライティングができているか？

全ての段落とはいわないが、おおむねパラグラフ・ライティングが実践できているか確認したほうがよい（パラグラフ・ライティングに関しては第8章を参照されたい）。例えば、各章の中心となる議論（2節や3節など）については、混み入った詳細な話が展開されてい

て、初見では読みづらいことも多い。そうしたところは、特にパラグラフ・ライティングでわかりやすく書いた方が良いだろう。

□ 全体的に論理が一貫した内容になっているか？

卒論は研究である以上、内容が論理的でなければならない。そのために、アウトラインを作成することを本書の第6章で推奨した。しかし、現時点で再びアウトラインを作成してみしてほしい。それは実際に書いた内容の骨組みを点検するという作業を意味する。そうすることで、現時点で論理的でない箇所や、論理の抜けがあるところが発見できるようになる。手間はかかるが、是非やってみてほしい。

□ 情熱的になって書き過ぎていないか？

これは筆者の反省の意を込めて伝えておきたい。卒論を書き終わろうとすると、なぜか最後に情熱的な内容を書き足してしまいがちになる。そうでなくても、卒論を書き進めていくなかで、筆が滑っていろいろと書いてしまうことがある。上のアウトラインの話にも関わることなのだが、実は本文を改めて読み直すと「必要かこれ？」というものが少なくないのだ。そこで必要ないと思われるものは、勇気をもって削ってほしい。そうすることで、冷静な論理的文章を洗練することができるからだ。

9-2. 【提出前】のチェック項目（形式編）※コラム⑧でも詳細に紹介している

□ 指定された体裁がしっかり守られているか？

例えば、「フォントの大きさ」や「余白の幅」など、学科事務等から指定された体裁を守られているか、必ず確認してほしい。フォントの大きさについて、特に指定がない場合には「10.5 pt」でよい。

(指定される体裁項目例)

- ・フォントのスタイルと大きさ
- ・用紙サイズと余白の幅
- ・目次の作成
- ・1頁あたりの文字数（行と字数）
- ・箇条書きの有無（章番号や節番号）
- ・表紙の体裁

など

□ 引用スタイルは何らかの基準に則っているか？

引用の表記の仕方や引用文献リストの書き方が何らかの基準に則っているか確認していただきたい。独自のルールは使わない方がよい。筆者は社会学に近い領域でもあるので、以

下の「社会学評論スタイルガイド（2023年9月1日確認、<https://jss-sociology.org/bulletin/guide/>）」を常々参照しながら引用している。ほかにも、有名なものではAPA（American Psychological Association：アメリカ心理学会が出している社会科学の多くが準拠しているスタイル）Chicago Manual、MLA、バンクーバなどがあるため、必ず研究室の先輩や指導教員などに聞いておいてほしい。

□ 誤字・脱字のチェックを怠っていないか？

これは言わなくとも必ずやっているだろう。しかし、案外「脱字」に気づかないことは多い。そこで、もし可能であれば、誤字・脱字のチェックは他の人にやってもらうほうがよい。自分で書いていて「誤字」には気づけるが、「脱字」はあまり意識していない場合も多い。

□ 図・表の細かいチェックを行っているか？

引用やデータが全て文字であればよいが、社会科学や自然科学ではそのような論文は少ないだろう。そのため、何らかの図や表を作成（あるいは、引用）しているはずである。しかし、その際に図や表に欠陥があると、データとしての信頼性にも関わる事態になってしまう。必ず、図や表は何度もチェックしたほうがよい。

（特に気をつけておきたい点）

- ・ 出典は明記しているか
- ・ 小数点の位置は統一されているか
- ・ 情報に漏れはないか（単位記号の抜け落ちやクロス集計表でNの値が無いなど）
- ・ 逆に情報を入れ過ぎていないか（重要ではない時系列の範囲や記述統計で必要ないパーセントまで記載するなど）

これだけをチェックするにもかなり時間を要するので、必ず10日前にはやっていただきたい。それよりも前でも全然構わない。

また以上のチェック項目はあくまでも一般的な内容であるため、指導教員等からコメントが入った場合には必ずそれも確認していただきたい。

コラム⑧ 校正の流れ

卒論は一気に書き上げることができるものではないですから、少し書いては読み直し、また少し書くということを繰り返してようやく最後まで書き終えたと思います。ホッとする気持ちもありますが、まだ安心はできません。最後まで書き終えた段階で行うのが「校正」です。

校正とは誤字や表記の揺れ、文字の配列などをチェックし正しい書き方になっているかどうかを確認することです。つまり見直しのことです。書いている途中で何度も読み返しているから改めて校正する必要があるかなと思う人もいるかもしれませんが、長い時間をかけて少しずつ書いてきたものだからこそ、最初の方と最後の方で表記が統一されていないなんてことも十分ありえます。校正は提出前に必ず行いましょう。

では具体的にはどんな点に注意して校正すれば良いのでしょうか。実は着目すべき箇所は、レポートの見直しの場合と大きくは変わりません。次の3つのポイント(本文、文献リスト、形式・体裁)ごとに確認しましょう。

【本文】

- ① 「てにをは」は適切か。
- ② 接続詞は適切か。
- ③ 送り仮名や漢字の間違いはないか。
- ④ 改行の位置は適切か、また改行したら先頭を1マス空けているか。
- ⑤ 字数は既定の総字数を満たしているか、また指定された規定を守った字数か。

①の助詞や②の接続詞は全体が書き終わったからこそ、適切な表現になっているか確認が必要です。③の送り仮名や漢字の間違いは読み直すたびにミスが見つかることの多い項目です。また④の改行は適切な箇所で行われているのでしょうか？やたらと一段落が長い、ほかの段落と比べて分量のバランスが悪いなどは修正しましょう。

忘れがちなのが、段落の初めは1マスあけることです。1マスあけず、つめて書いている人は1マスあけましょう。最後に⑤の字数です。これは規定の総字数を満たしているかどうかだけでなく、研究室によっては1行あたり何文字、1ページあたり何行といった細かな決まりがある場合があります。指定されている体裁になっているかも確認しましょう。

次に文献リストの校正ポイントです。

【文献リスト】

- ① 文献リストの書き方は適切か。同じスタイルで統一されているか

② 本文中で引用したものは全て文献リストに載っているか。

文献リストでは本や論文の著者名、タイトルなどの書誌情報を書きます。文献リストの書き方はAPAやChicago Manualなど様々なスタイルがあります。分野によってどのスタイルを使うか決まっていますので、1で挙げたように自分の分野の書き方を確認し、1つのスタイルで統一して書きましょう。また2のように本文中で引用したものは必ず文献リストに入れます。

引用はしていないが、参考のために使用したという文献もあると思います。このような参考資料を文献リストに入れるかどうかは分野によって異なるため、各自で確認してください。

最後に形式・体裁の確認についてです。

【形式・体裁】

- ① 表紙・本文ともフォントサイズ、文字位置、余白は適切か。
- ② 指示された提出形式になっているか（紙に印刷／Word／PDF）。
- ③ （求められている場合）要旨は付いているか。

レポートの場合は表紙をつけなくても良い場合がありましたが、卒論では表紙をつけて提出するのが一般的です。表紙の書き方は自分の研究室で指示されたものとなっていますか。1のように表紙・本文ともフォントサイズや文字位置、余白などが適切な状態か確認しましょう。

2の提出の仕方も様々です。紙に印刷するのか、WordやPDFなど電子版で提出するのか、もしくはその両方と言われることもあります。普段のレポート提出とは異なりますので気を付けてください。

提出すべきものにも抜け漏れがないか確認します。分野や研究室によっては、表紙と本文だけでなく、3のように卒論の要旨を求められる場合があります。提出物に不足がないようにするためにも、これらの確認事項は忘れないでくださいね。

補章 出しても終わりじゃない！？（提出後）

本章では【提出後】にも卒業論文に関わる作業が残っていること、その準備を進めていくことについて確認しておきたい。ただし、細かな準備についてはコラム⑨を参照していただければ幸いである。ここでは、主に提出後の流れを確認しながら、どのような作業が残っているのかを示すのに留める。

10-1. 提出直後

◆事務からの連絡に気を付ける

「提出お疲れ様でした！！」ということで、解放感に身を任せて旅行にでも行きたいだろうが、提出直後はまだ気を抜かないでほしい。なぜなら、不備のあった卒論については、提出後1～2日以内に事務から連絡が来る場合があるためだ。例えば、表紙の表記にミスがあったり、体裁等に問題があったりすると、事務から修正の依頼が来る。それを放置してしまうと受理されなくなるので、気を付けていただきたい。

◆研究室の後輩へ前例を残す

もし事務からの連絡がなければ、あるいは修正が終わった場合には、ぜひ研究室の後輩に向けて卒論の完成稿を残しておいてほしい。特段、製本をする必要はない。みなさんが様々な困ってきたように、後輩たちもきっと同じような悩みを抱えることだろう。そのときの助けとなるように、提出したらすぐに後輩に残すための印刷等を行っていただきたい。

10-2. ひと段落ついたら…

◆発表 or 口頭試問

提出後（修正後）、ひと段落ついたら発表や口頭試問の準備に取り掛かっていく。卒論では提出で終わりではなく、研究室等で発表したり、あるいは論文として一定の評価を得るために口頭試問による審査が行われたりすることになる。コラム⑨でも書いているが、いずれかを行う場合がほとんどであるため、必ず確認していただきたい。

◆単位認定がある場合は確認も

卒論は、学部等によって異なるが、単位認定される場合がある。そこでもし単位が認定されていないなどのアクシデントが生じると、卒業ができなくなる可能性がある。そのため、単位認定される場合には、認定されたかどうかを確認しておいてほしい。もし認定されていなかった場合は、事務等に連絡していただきたい。

コラム⑨ 発表・口頭試問の準備

卒論の提出お疲れさまでした。これで何の気兼ねもなく卒業旅行に行ける！となってはいませんか？実は卒論は今までのレポートとは異なり、提出したら終わりというわけにはいきません。皆さんは卒論をもとに発表をするか口頭試問を受けることになります。楽しみな予定を前に、最後まで気を抜かずにもうひと踏ん張りしましょう。

発表は、指導教員を含む先生方複数名、同じ研究室の仲間や先輩、後輩の前で、自分の卒論で行った研究をプレゼンするというものです。口頭試問は、指導教員を含む先生方から卒論に関する質問を受け、それに答えるというものです。多くの場合は、口頭試問は学生一人ずつ行い、他の学生が同席することはありません。発表か口頭試問かは研究室ごとに決まっています。まずはこれらの実施日を把握し、卒業旅行で参加できないなんてことにならないようにしましょう。

1 発表の場合

卒論は論文の形にしましたが、発表する場合は論文をもとに PowerPoint で発表資料を作ります。その際、以下の点に気を付けましょう。

- ① 「問い」と「答え」をセットで説明する
- ② 研究の目的と意義の説明を加える
- ③ スライドのタイトルで聴衆の興味を引き付ける

①は卒論の概要を説明する際、外せない項目です。どんな「問い」を立てその問いに対してどんな「答え」が出たのかを明確に伝えます。ここでポイントとなることは、自分の発表時間内に収まるように「問い」と「答え」のセットを説明することです。詳しく説明しようとあれもこれもといった情報を加えることで、肝心な「問い」と「答え」のセットがあやふやなまま発表が終わらないようにしましょう。

②は何のためにその研究をしたのか、研究目的と意義を説明します。持ち時間に合わせて、先行研究で明らかになっていることと、問題点を説明します。また、研究の意義をより多くの聴衆に理解してもらうため、高次の問いと結びつけることも重要となります。さらに卒論で新たに生じた課題や問題点を指摘することも、自分の研究の限界点を明らかにする意味で、意義の説明となるでしょう。

③はスライドのタイトルについてです。タイトルは、お店の看板のようなもので、聴衆はまずタイトルをみて、興味をもちます。そのため、一番重要な要素といっても過言ではない

です。タイトルは、(1) どのような問い(課題)に対する議論か、と(2) どんなアプローチや素材(試料)で議論したのか、が伝われば大丈夫です。

次に発表の場での注意点です。

- ① 言葉遣いのチェック
- ② 時間の管理
- ③ コミュニケーション

①は一人称で「わたし/わたくし」を使うこと、耳で聞いてわかりにくい単語を避けるなどです。普段の授業で行ってきたプレゼンの時と同じですね。

②も基本的なことですが、与えられた時間を過不足なく使いましょう。前述したように自分の説明で伝えるべき項目を時間内に述べ終わることも重要ですが、何より必ず質疑応答の時間を残しておきます。

③は質疑応答の時に注意したいことです。質問してもらったら、まずは聞かれたことに答えます。卒論で上手くいかなかった箇所があったとしても、最初に言うべきことは言い訳や反省ではありません。

2 口頭試問の場合

口頭試問は研究室にもよりますが、指導教員が主査、分野に近い別の先生が副査となり、2対1で質問に答えるという場合が多いです。時間も分野によって異なりますが、一人約15～30分です。

口頭試問に向けての準備・対策として、まずは日時、場所、持ち物や服装などの情報を把握しましょう。持ち物として、卒論を事前に印刷して審査の先生方に提出する、当日自分の分のみ持参するなど決められていますので必ず事前に確認しましょう。

次に質問内容を想定して簡潔に説明できるように準備をします。以下の質問例を参照してください。先生が気になった個別的な質問は対策しづらいですが、要旨や問題設定、研究意義、今後の課題などは言いたいことをまとめておくと当日焦らずに済みます。

質問の例

- 卒論の要旨
- 卒論で取り組んだ研究の意義
- 良かった点と悪かった点
- 今後の課題
- 引用されているほかの研究資料、先行研究について
- その他先生が気になった点

あとは、卒論を書き終えた後も完全なお休み気分にならないように、口頭試問の前には見返しておくことで、個別的な質問にも答えられるようにしましょう。

おわりに

卒業論文を完成させることは、幾度となく選択を迫られることでもある。その選択の多さは人生のなかでも稀かもしれない。おそらく、恋愛や就職以上に細かな選択に迫られるからだ。研究テーマは何にするのか？先行研究はどれを読むのか？調査をどうやって行うのか？そして、論文とはどのように書けばよいのか？

本書の冒頭で、その選択を判断するのは最終的に学生のみなさんであり、その一助に本書がなれば幸いであるという願いを綴った。力不足なところも多々あるだろうが、細かな選択の数々に関して、本書を通じて何らかのアドバイスを伝えることができたと思っている。ただし、私たちサポートスタッフの努力が報われたかどうかは、みなさんの卒業論文を読む以外に方法はないかもしれない（笑）。

さて、本書を執筆するにあたり多大なる尽力を頂戴した、ここで感謝申し上げたい、という謝辞を一度書いてみたかった。サポートデスクとして共同で進めたものであるから、かしこまったものは必要ないかもしれないが、私自身の感謝を若干記させて頂きたい。とくに、本書と一緒に執筆した小島秋良さんには、執筆ペースがまったく不揃いな筆者とは対照的すぎるほどに順調にコラムの原稿を送っていただき、筆者の背中を何度も押ししてもらえた。また、編集に携わっている図書館の皆さまにも、本来ならばもっと早くに原稿が終わっているはずであったにもかかわらず、ここまで一緒に進めて頂き感謝の言葉が尽きない（です）。

最後に、ここまで読み進めてくださった大学生の皆さま。本書はあくまでも卒論を書いた人の「声」に過ぎない。それゆえ、困っていることをすぐに解決してくれるものではないかもしれない。また、そのような「声」はネット上にも沢山散らばっている。しかし、最近ではその経験を数百円ほどで売るブログも出ており、さらにネット上の情報を精査することも難しくなっている。一方で、本書は日ごろから大学院生として研究し、大学生の学習相談を受けているサポートデスクのスタッフの「声」である。それは、過去の経験に留まらず、現在の動きにも目を配らせている点でほかの「声」とは一線を画するものだろう。

またサポートスタッフでは『アカデミックスキルズ 大学生ならこれだけは知っておきたいキホン』という、大学1年生向けのアドバイスをまとめたものもある。本書の読者には縁遠いものかもしれないが、これからも大学生活を過ごしていく後輩に向けて、その本と本書を合わせて先輩である自身の「声」とともに届けてほしい。

先輩の「声」がひとりでも多くの後輩に届くことを願っている。

藤川 寛之

参考文献

- 飯間浩明、2008、『非論理的な人のための 論理的な文章の書き方入門』ディスカヴァー・トゥエンティワン。
- 石黒圭、2021、『文系研究者になる——「研究する人生」を歩むためのガイドブック』研究社。
- 伊丹敬之、2001、『創造的論文の書き方』有斐閣。
- 岸政彦・石岡丈昇・丸山里美、2016、『質的社会調査の方法——他者の合理性の理解社会学』有斐閣。
- McCracken, G., 1988, *The Long Interview*, Newbury Park, SAGE Publications. (寺崎新一郎訳、2022、『インタビュー調査法の基礎——ロングインタビューの理論と実践』千倉書房。)
- 箕浦康子編、1999、『フィールドワークの技法と実践——マイクロ・エスノグラフィー入門』ミネルヴァ書房
- 中河伸俊、1999、『社会問題の社会学——構築主義アプローチの新展開』世界思想社。
- 日本学術振興会、2015、『科学の健全な発展のために——誠実な科学者の心得』丸善出版。
- 佐渡島紗織・吉野亜矢子、2021、『これから研究を書くひとのためのガイドブック 第2版』ひつじ書房。
- 酒井聡樹、2017、『これからレポート・卒論を書く若者のために 第2版』共立出版。
- 佐々木健一、2014、『論文ゼミナール』東京大学出版会。
- 上野千鶴子編、2001、『構築主義とは何か』勁草書房。

執筆者

藤川 寛之 (ふじかわ・かんの) 1章~9章、補章
名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士後期課程。

小島 秋良 (こじま・あきら) コラム①~⑨
名古屋大学大学院人文学研究科博士後期課程。

表紙

樋脇 晃祐 (ひわき・こうすけ)
名古屋大学大学院工学研究科博士前期課程。

編集協力者

池田 優 (いけだ・まさる)
名古屋大学大学院工学研究科博士前期課程。

幸田 侑希 (こうだ・ゆき)
名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士前期課程。

杉浦 航 (すぎうら・わたる)
名古屋大学大学院理学研究科博士前期課程。

卒論を書いた人の「声」

大学院生が語るリアルな作業プロセスとアドバイス

発行日：2023年9月21日

著者：名古屋大学附属図書館サポートデスク

発行所：国立大学法人 東海国立大学機構 名古屋大学附属図書館 情報サービス課

〒464-8601 名古屋市千種区不老町

<https://www.nul.nagoya-u.ac.jp/>

調査学習支援グループ lib-c-literacy@t.mail.nagoya-u.ac.jp